慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	琉球史上に於ける武力と魔術との考察 : 護佐丸に就いての疑問より出發して
Sub Title	
Author	伊波, 普猷(Iha, Fuyu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.3 (1926. 7) ,p.1(307)- 107(413)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學　第五卷　第三號　大正十五年七月

琉球史上に於ける武力と魔術との考察

——護佐丸に就いての疑問より出發して——

（この一篇を東恩納寛惇君にさゝぐ）

一

『毛氏先祖由來記』に現はれた護佐丸の最期に就いて、私は永い間、疑問を抱いてゐた。私はこの疑問から出發して、琉球史上に於ける武力と魔術との關係を考察して見たいと思ふ。先づその原文を引用することにしよう。

護佐丸は不意の討手を被レ蒙、己が本意を申開かんと思せども、事急に罷成、告げ訴ふる所なく、只天を仰ぎ嘆かれ、我罪なし、今佞人の爲めに此の難に逢ひ、いと口惜し、乍然勅命なれば、違く可きの道なし、只切腹せん、と申されければ、群臣皆進み出で、我君罪なき所は、天の照覽曇りなし、速にかけ出で戰ふ

べし、と申候へども、護佐丸許し給はず。吾罪なき所は、上天隱れなく、世を擧げて知る所にて候。勅命に向つて矢を放つべきの理なし、只鎭まれよとて、堅く制せられ、大手の門を開き、阿摩和利に向つて、逆賊よく聞け、吾罪なくして、討手を蒙る事偏に汝佞奸の讒に因てなり。唯今手取にて、首を刎度候へども、君命とあるに背かず、我は自害致すべく候。汝天罪を蒙り、征伐を受るときの手本にせよ、と仰せられ、即ち城の東岩下に立寄り、上天吾眞僞を分明にし給へかし、と唱て、夫人長男二男諸共に、自害成され候間、遠近の臣僚、殉死する者、數へ難く之ありたる由、云々。

護佐丸のこの態度に就いては、明治廿九年、私が上京した翌々年だつたか、沖繩の留學生間で、或者は之をあつぱれな忠義だと賞讃し、或者は之をつまらない犬死だと非難して、盛んに議論が闘はされたものだが、一高在學中の照屋宏君は、その頃「沖繩青年會々報」に、護佐丸論を書いて、護佐丸は、阿摩和利を監視するために、折角中城の要害に置かれたのに、阿摩和利の讒言によつて、あべこべに彼奴にやつつけられたのは、氣がきかない。彼奴が官軍の將として來り攻めたところで、部下が献策した通りに彼奴を片付けた後、首里へ上つて、その寃を訴ふべきであつた。然るに、徒らに儒教的訓戒を守つて自殺したのは彼奴を跋扈させて、王家の位置を危險にさらしたもので、斷じて責任を重んずる態度ではない、といつたやうな氣焔を擧げたことがあつた。この時、私も護佐丸は、一戰を試みて、討死して呉れるとよかつたのに、といつた覺えがある。

明治卅八年の六月廿二日の晩、「阿摩和利考」を書いて了つた後に、阿摩和利の人物が生々してゐるに反して、護佐丸の人物が萎びてゐるのを物足りなく感じた事があつたが、その後この由來記が「聖諭廣訓和解」の著者、文者世那城（盛郁）によつて書かれたといふことを聞いて、一種の疑問を起すようになつた。この由來記が書かれた年代は判然しないが、世那城は安永三年（西暦一七七四）に生れて、天保四年（西暦一八三九）六十歳の時に死んでゐるから、彼の卅歳以後に書かれたとすれば、多分文化から文政の間に出來たもので、さう古くないものになつて了ふ。世那城はいづれ世譜以下球陽に至るまでの史籍を參照して筆を執つたに相違ないが、全體の調子特に護佐丸の最期のあたりが、儒教的、餘りに儒教的になつてゐて、彼が生存してゐた時代の背景とはそぐはないやうな氣がしたので、事によつたら、護佐丸は一戰を試みたが、力盡きて、戰死したに相違ない、と臆測を逞しうするやうになつた。

たしか、大正四年の夏頃だと記憶してゐるが、當時、中城尋常高等小學校の校長であつた比嘉重德君が、曝書山莊に私を訪れて、古い記錄を私に見せてくれた。見るからに蟲ばんだ古い寫本で、おまけに表紙が取れて、本の名も全くわからなかつたが、讀んでいく中に、一種の護佐丸傳であることがわかつて來た。

其内容は『毛氏先祖由來記』のそれと大同小異だが、それよりももつと詳しくなつてゐて、而も護佐丸の最期の記事が、あの由來記のそれとは、全く反對で、私の注文通りになつてゐるのを見て、私は飛

び立つやうに喜んだ。煩を厭はず、之を紹介して見よう。

只今之寄手は嘸阿摩和利にて可レ有レ之候。此程彼心底察入候得者、君に叛逆之志有レ之候得共、我中途に罷居候故、難レ及二其儀一、先以我を亡せ、後謀叛之企可仕との讒訟、決定之事候。然者君命を重んじ、徒に自殺仕候者、却而不忠之筋に候間、先阿摩和利搦取國家之禍を除け、其後兎に茂角に茂可レ仕候間、汝等盡二精力一、可二相働一旨、被レ仰候間、各日比蒙二恩澤一罷在候間、身命露計茂不レ惜、先を爭、我先に出向、防戰仕候得共、多勢に無勢難當、打死仕候付、護佐丸に茂最早運命盡果候事と被二思召一候。然共、國家滅亡之媒に成立候儀、適口惜次第、言語道斷之仕合と御悲嘆不レ斜、終に御夫婦並御子息御兩人部類に至迄、城之東表於二岩下一、被レ成二御自害一候。云々。

古英雄の片影が、躍如として現はれてゐるではないか。

私はこの本を假りに『異本毛氏先祖由來記』と名付けて置かう。然らばこの由來記は何時頃何人によつて書かれたのであらうか。卷末に、特に、

右者元祖毛姓中城按司護佐丸本來之儀、正統家譜に茂大略は記置候得共、細密之儀相見得不申、至永代傳失仕候而不叶故、筆者何氏高江洲筑登之親雲上中取毛姓大城筑登之親雲上同姓山城筑登之親雲上を以、御世譜記事舊記由來記年來記又者正統系圖彼是引當之上、一卷書記申候以上。

と附記してあるところから考へて見ると、護佐丸の子孫等が、祖先の歷史が誤り傳へられるのを憂ひて、親族會議の結果、特に一族中から二人を選び、外に文筆の達者な者一人を雇うて、之を編纂させた

ことが明白になつて來る。そして政府の編纂に係る中山世譜を參考しながら、護佐丸の最期のことを書くに當り、思ひ切つてその說を否定して、祖先傳來の口碑を採用したのは多とすべきことではないか。

私はこの編纂者達が、中山世譜（元祿十四年西暦一七〇一年）琉球國由來記（正德二年西暦一七一二年）琉球國舊記（享保十六年西暦一七三一年）等を參考して、球陽（延享五年西暦一七四五年）を參考しないのを見て、最初のほど、この由來記は、享保十六年から延享五年の間に、編纂されたものだと思つてゐたが、後でその中に、乾隆二十四年、護佐丸の三男の乳母の位牌を仕立てゝ、正統豐見城家の脇柵に安置したといふ記事のあるのに氣付いて、その寶暦九年（西暦一七五九年）以後に編纂されたものであることを知るやうになつた。兎角、この由來記があの由來記よりも古いやうな氣はするが、今少し研究して見ないと、はつきりしたことは言へない。けれども、兩方をよく比較して見ると、彼が國民道德の宣傳用として、編纂されたに對して、これが祖先の歷史の眞相を後昆に傳へる爲に、編纂されたことは、最早疑ふ餘地がない。これはこの論文の結論を見たら、なるほどと頷かれるだらうと思ふ。

同由來記に、この時戰死した主從の屍に就いての記事があるが、參考までに、こゝに引用することにしよう。

護佐丸被レ成二御切腹一候岩下風水能有レ之、御墓所作立、御靈骨奉安置候處、右御墓崩潰仕候付、康熙二十五丙寅年、久米村蔡氏大田親雲上中城間切城の側靈地被二見立一候而、墓所奉レ設、一門中に而作替、御靈

骨奉レ移候。然處其後御墓番比嘉親雲上右古御墓より骨拾取、護佐丸御骨に而者有レ之間敷哉之旨申上有レ之候得共、古御墓之儀、御家來之輩共ゝ被レ致二自害一所候得者、至レ于レ今護佐丸御骨と難二相決一、且又新御墓江奉レ移候砌、不念之儀共は無レ之積に而、小墓仕立納置申候、云々。

二百四十年前までは、ごつちやになつてゐたが、護佐丸及びその妻子の骨を選りわけて、別の墓地に移し、勇士のは一纒めにして、その儘其處を墓地にしたやうである。土地の人は矢張之を當時の戰死者の骨だと云つてゐる。この骨をよく調べて見たら、刃を受けた跡などがついてゐるに相違ない。歸省した時、行つて調べて見たいと思つてゐる。

それから中城の安谷屋邊には、かういふ口碑が遺つてゐる。それは、八月十六日の朝、村の若い連中が、前の晩の餘興に疲れて、芝草の上に寢ころんでゐた時に、座喜味里主(ざきみさとぬし)が、讀谷山勢(よんたんぜ)を率ゐてやつて來たので、村人は吃驚りしたが、中城(なかぐすく)の城が阿摩和利の軍隊に圍まれてゐるので、助太刀に行くのだと聞かされて、一同矛を執つて、讀谷山勢について行つたら、途中で、中城城は陷落したと聞いて、空しく引返したといふことだ。口碑によると、護佐丸は十五夜の觀月の宴の酣なる時に、不意打を喰つたといふことだから、所謂「島寄せる鼓」を打鳴らして、四方の軍士を集め、早速飛脚を舊領地の讀谷山に立てゝ、援兵を請うたに相違ない。飛脚が、(事によつたら、騎馬武者が)二三時間もかゝつて、座喜味に行き、急を告げたので、その親類筋の座喜味里主は、早速軍士をかり集めて、飛んで來たであらう。

うして安谷屋を通過する頃には、大方夜が明けたゞらうから、この口碑は、まんざら嘘でもないやうな氣がする。

大正十三年の「沖繩教育」の七月號に私は「オモロに現はれた鼓」といふ一篇を出して、その中に、戰國時代には、いゝ皷を所有してゐるといふことは、「國々の接司部」の誇りとするところであり、從つてその有無と、良否とは、「シマ」の運命にも關係したことであらうといつたやうなことを書いたことがあつた。重複する嫌ひはあるが、左にその以下の十數行を引用することにしよう。今でも村落で人を集める場合には、ソロインショーレーと呼ばゝりつゝ、種々の方法で大皷を叩くが、オモロを見ると、古琉球人も矢張りつゞみを打鳴らして、まひとべ(軍士)を集めたやうである。この重寶な皷のことを「しまよせるつゞみ」と云つてゐた。古代に於ては、今日と違つて、通信機關が不備であつたから、「太皷の言語」は非常に發達してゐたに相違ない。「夏姓家譜」の序文に、かういふ記事がある。

王大に怒つて曰く、逆賊阿摩和利、擊つて萬段と爲さば、吾が怨み解く可しと。即ち急に令を傳へ、四方の軍士を招聚す。未だ幾時ならずして、阿摩和利軍を率ゐて趕來り、火を放ち城を攻め、殺戰甚だ急なり。幸ひに、四方の軍士皆來り相助く。寡衆に勝たず、阿摩和利大敗して、而して走る。(原漢文)

これは「球陽」の記事と大同小異で、阿摩和利が首里城を圍んだ時の光景であるが、ほんとに危機一髪のところである。當時の沖繩の城は、南山城を除くの外は、南北朝時代の城みたいに、悉く山城にな

つてゐて、城中には常備軍がなかつたから、いざ鎌倉といふ時には、何かの方法で、四方の軍士を招聚したらう。この時首里城では、「しまよせるつゞみ」を打鳴らしたに相違ない。幸ひに勝連勢が殺到するまでに、多少間があつたので、「しよりま人（ひと）、げらへま人」（首里の勇士、精鋭なる勇士）等が、早速集會したからよかつたものゝ、さもなければ、阿摩和利は多分琉球國王になつてゐたであらう。

中城の城は、山城の代表的のもので、周圍の村落とは、餘程かけ離れた所だから、阿摩和利の不意擊にあつて、非常にうろたへたに相違ない。「しまよせるつゞみ」を叩きつゞけても、四境のまひとべは容易に集つて來ないので、已むを得ず、ほろ醉ひ加減な僅かばかりの部下を督勵して、奮戰したゞらうが、かつて北山王樊安知の精鋭を山田城に喰止めた流石の老將軍も、かういふ場合名に負ふ「しよりま人、げらへま人」の殺到に對しては、施すに術なく、矢盡き刀折れて、讀谷山からの援兵が到着しない中に、はかなき最期を遂げたのであらう。

二

以上述べたゞけでも、護佐丸が戰つて死んだといふことは、最早疑ふ餘地がないと思ふが、なほ之を當時の事情から觀察する必要があると思ふ。「異本毛氏由來記」の劈頭に、かういふことが見えてゐる。

夫、先祖毛國鼎中城按司盛春、神名護佐丸號名亨と申候。前代之事に而、御生死之年月不二相知一候。其

御親父山田按司者、中山之支流、當朝之〇〇に而、北山之關所爲二鎭守一、山田村江構二城郭一、被二罷居一候も、然共何王之御子孫とは相見得不レ申候。

この中で『中山之支流、當朝之〇〇』の十字は、注意すべき所だと思ふ。〇〇の所は、蟲がついて、はつきり讀めないが、字旁は確かに主東になつてゐて、二字共木偏のやうな氣がするから、多分柱棟だらうと思つてゐる。それから、「毛氏先祖由來記」にも、同樣な記事が見えてゐる。

護佐丸盛春公より先は山田の城主、前代より中山股肱の大臣にて、北山防禦の爲、彼所を被レ守たる由、古昔之事にて、姓名代數不二相知一候。護佐丸公時代に至り、中山一統に歸し候付、讀谷山に城を被レ遷、讀谷山按司と稱したる由、云々。

この二つの記事を總合して考へて見ると、護佐丸の祖先は、英祖の王朝か察度の王朝の時に、北山防禦の指令官として、中央から山田城に派遣された武將であつたか、それともその邊の豪族であつたか、二つの中どちらであつたかは、はつきりしないが、第一尙氏の佐敷以來の家臣でなかつたことだけは、斷言することが出來るのである。兎に角、尙巴志の包圍攻擊にあつて、中山城が陷落した當時、この北山防禦の指令長官が、山田城にゐたことは、明白なことである。この頃は、多分護佐丸の父は死んで、二十臺の若按司(若い領主)護佐丸が、この大任に當つてゐたやうな氣がする。彼に二人の兄がゐたといふことは、後でくはしく述べるが、二人の兄をさしおいて家督を相續したところから見ても、彼の軍事

的天才であつたことが能くわかるだらうと思ふ。

四五年前、陸軍大學出の大尉――その姓名を私は一寸思ひ出せない――が、沖繩圖書館に、私を訪問して、種々琉球史上の質問をしてゐたが、その中に、三山時代の中山と北山との國境はどの邊であつたか、といふのがあつた。その時、私が、北山防禦のために、護佐丸が山田城にゐたところを見ると、仲泊から石川に至るまでの地帶が、さうではなかつたかと答へたら、大尉は非常に喜こんで、私は二三日前その邊を跋渉して來たが、軍事眼で見て、是非さうなければならないと思つてゐた、と云つてゐた。其後私は、一二度その邊の歷史地理研究に出かけたが、この地帶の南側には、東西に連る小山脈が走つてゐて、その高臺の上に、山田城、安慶名城、具志川城、伊波城、といつたやうな中山の支城が、北方に面して、殆ど一直線に、相並んでゐるのを見て、面白いと思つた。そして讀谷山方面には、護佐丸の一族がゐたのに對して、美里具志川方面には、江洲といふ豪族がゐて、而も倭寇をやつゝけた伊波の按司が、その一族であり、阿摩和利征伐で有名な鬼大城が、その一族の安慶名城主の孫である、といふ口碑を聞いて、一層面白いと思つた。これで見ると、北山に對する中山の防禦は、比較的完全であつたやうな氣がする。

ひるがへつて、その南山に對する防備を見ると、首里を以て、直接南山に對してゐる。そして其處には何等支城らしいものを發見することが出來ない。五百年前には、眞玉橋の橋もなく、那覇江の水は深

く入込んで、南山から中山に侵入する道が、島襲大里（しまおそひおほさと）と、南風原（はえばる）としかなかつたとしても、又南山が、北山のやうに、强敵でなかつたとしても、國境を距ること一里足らずの所に、首府があつたといふことは、危險千萬な話である。そこで、首里が果して當時の都であつたかどうかといふ疑問が、當然起つて來なければならなぬ。私は明治卅八年頃「浦添考（うらおそひ）」を書いて、浦添が首里以前の都であつたらうといふことをほのめかして置いたが、この事に就いては昨秋東恩納文學士が啓明會の講演會で述べられた「琉球史概說」中の說を拜借するのが、好都合だと思ふ。

……序に私は琉球の都のことを申上げますが、此の時代までは浦添であつたらう思ひます。浦添といふ地名は、浦々を支配する所と云ふ意味を有つてゐる事は伊波君の研究によつて定說となつて居ります。オモロにも、浦添に東西の貢租を持ち寄せた事や、又浦添は「島の親」と云ふ詞などが見えて居り、宋僧禪鑑が英祖の二年に渡來して始めて禪宗を傳へた時にも、極樂寺を浦添に營んで居ります。之れ等の點からして少くとも英祖の時代までは此の地が都であつたやうに思はれますが、それではいつ頃首里に遷都したかと考へて見ますと、尙巴志王が三山を統一する時に、まづ中山を攻めんとして兵を浦添に進めたことが世鑑にも見えて居りますが、尙巴志より四代目の尙金福の時代には首里那覇街道の一部である長虹堤を築造したことがありますから、其の頃は最早都が首里にあつたものと思はれまするので、私は尙巴志三山統一後間もなく都を遷したものと考へて居ります。

大里邊の口碑によると、尙巴志は大里城の石垣の石で首里城を擴張したが、この時大里から首里城まで半間置きに人を立たせて、石を手渡しゝたといふことだ。三山時代には、首里城が今見るやうな堅固なものではなく、浦添城の支城であつたことは、これで明かになつて來るだらうと思ふ。

序に中山に對する南山の防備を觀察して見ると、前にも述べた通り、當時の沖繩の城が、南北朝時代のそれのやうに、山城であつたに反して、南山のは、室町時代のそのやうに近代的になつてゐる。ちよつと見たら南山城は平坦な所に築かれてゐて、直ぐ陷落しさうな所だが、周圍に澤山の支城があつて、外からは容易に侵入することが出來ないやうになつてゐる。中山の侵入軍を彼等は、しまおそひ大里の城や、豐見森城で喰止めることが出來たのだ。そしてこゝで暫らく支へてゐる中に、南山城では、ゆつくり戰鬪の準備を整へることが出來たのだ。世鑑に百有餘年の間に、中山と北山とが七十餘回も戰つたといふことが見えてゐるのに、中山と南山との間にさういふことがあつたといふことが、世鑑にはもとより、他の史籍にも、見えてゐないのを見ると、絕えず北山に威嚇されてゐた中山は、こんなことで、南山には容易に侵入しなかつたと思ふが、どんなものであらうか。

佗魯毎の時代に至つて、南山王國が衰へると、島襲大里按司は、近隣の按司部を征服して、しものよのぬし(南山王の義)と稱し、尙巴志と姻戚關係のある大城按司が、その犧牲者の一人になつたことは、麻氏家譜の語るところだが、かうして彼は、南山の南部を占領して、しもしまじり(南山)を壓したの

で、その城下の大里が、遂にしまおそひ（島を襲ふの義）といふ形容詞を取るに至つた。隣の佐敷から佐敷の小按司（尙巴志）といふ豪傑が興らなかつたなら、彼は多分中山王か南山王になつてゐたかも知れない。オモロに「おほざとのとよみもり」といふことがあるから、彼の領土は與那原港から、那覇港の南岸にまで達してゐたに相違ない。思ふに、かうして、南山及び新興の佐敷に對する緩衝地帶が出來たために、中山は暫らく小康を得たのであらう。

けれども、島尻の一隅で、おもむろに實力を養つてゐた尙巴志が、突然しまおそひ大里を攻擊して、しものよのぬしを亡ぼしたので、沖繩の形勢は一變せざるを得なかつた。大里城の地形を見ると、もと南山の支城であつた爲に、中山に向つてゐる方面は斷崖絕壁で、至つて險阻であるが、南山に向つてゐる方面は全くその反對で、至つて平坦であるから、尙巴志の不意討にあつて、容易く陷落したのは、當然なことゝ云はなければならぬ。尙巴志は早速其處に引越して、中山のすきを窺つてゐたに相違ない。彼が南山を後廻しにして、最初に、大里の城を拔いて、中原への出口を見出したのは、最も利口な作戰といはなければなるまい。（拙著『おもろさうし選釋』三三頁——三六頁參照）

當時中山は、前後に敵を控へてゐたので、その兵力を二分して、一半は南山に備へ、一半は北山に備へるといふ苦しい立場にあつたが、二山に比較して、土地が遙かに豐饒で、その上盛んに海外貿易を營んで、經濟的基礎を强固にしたのと、より多く外國と接觸したために、その進步した武器を採用したの

とで、久しく持ちこたへることが出來たゞらうと思ふ。話が少々横道に這入るが、當時の武器に就て述べて見ようと思ふ。『おもろさうし』十四の卷の五章に、頭に鉢卷を纏ひ、絹の帶をしめ、大小を横へ、山羊の草履を穿ち、陣羽織を着て、白馬金鞍に跨る、眉目秀麗な、知花按司を謳つたオモロがあつて、それで、當時の武將の日常の扮裝は窺はれるが、一の卷の五章に、緋威の鎧を着け、太刀を佩いて、進軍する尙巴志を歌つたオモロを見ると、戰時に於ける當時の武將の扮裝を知ることが出來る。十の卷の十五章の、阿麻和利を擊退した時のことを歌つたらしいオモロに、首里の武士、精鋭なる武士に、鎧を選んで着せたといふことがあるのを見ると、當時大將株ばかりではなく、兵卒の中にも、甲冑を着けたものゝゐたことがわかる。この事に就いては、「おもろさうし選釋」中に、くはしく書いて置いた。それから「七十人弓持ちへ」といふこともあるから、弓を使用したことは勿論だが、その外にも、彼等は種種の武器を使用したやうだ。

二十一の卷の五十三章に、

一あけの、　こしらいや、
なだか、　こしらいや、
てばかり、　やり
せめつけて、　とよま

又いちもりが、　さきに
あいもりが、　さきに、
又かなかぶと、　きやり
かな、　よろい、　きやり
又うしあや、　たて、　とやり
ぬり、　てほこ、　とやり
又いちやぢや、　せめつけて、
かなぢや、　せめつけて

といふオモロがあるが、これは、アケノコシライが、名立たるコシライが、奇計を廻らして、攻撃したのは讃美すべきかな！　イチモリのさきに、アイモリのさきに、金甲を着けて、金鎧を着けて、美しい牛楯を手に執つて、塗鉾を手に執つて、板門を攻撃してマア、金門を攻撃してマア。といふことで、金甲、金鎧、牛楯、塗鉾等の和名が出てゐるところなどを見ると、當時盛んに日本の武器の輸入されたことがわかる。平安朝時代既に、瓦を買ひに大和の旅に上つたことがオモロに見えてゐることや、室町時代に、日琉の交通が頻繁であつて、察度の時に、日本の商賣人が、牧港に出入してゐたことなどを見たら、この邊の消息が、はつきりして來るやうな氣がする。

十九の卷の十一章に、「知念杜城、唐の船、許巨良寄る城」といふのがあるのを見ると、尙巴志は、ま

だ佐敷にゐた頃に、支那との交通も開始してゐたやうにも思はれる。それから當時日本船が鐵塊を積んで、與那原港にやつて來たので、彼が名劒を賣つて、その鐵塊を買ひ取つたといふこともあるから、彼が夙に海外貿易をやつて、經濟的基礎を固め、その上、文明の利器を輸入して、三山統一の準備をしてゐたことは、推測するに難くはない。

人間は百年間も戰爭ばかりしてゐると自然戰爭は上手になるもので、沖繩人の軍事思想もこの一世紀の間に長足の進歩を遂げて、たうとう護佐丸や尙巴志の如き軍事的天才を生み出すやうになつた。

佐敷の山中から「島おそひ大里」の平原に出て來た尙巴志は、糧食を準備し、大里城を修理して、おもむろに中山の動靜を窺つてゐた。機會は遂に到來した。應永二年(西暦一四〇五年)、彼は疾風迅雷の如く、驀地(まつしぐら)に兵を浦添に進めて、中山城の虛を突いた。この時中山は、北山と事を構へてゐたか、それとも城内に大饗宴でもあつて、防備をおろそかにしてゐたか、その邊ははつきりしないが、「球陽」にはやはり「島よせる皷」を打鳴らして、四境の軍士を招集したが、走せつけたのが少くて、時の中山王武寧は、竟に出でゝ、尙巴志の軍門に降つた、といふやうなことが見えてゐる。此の時に當つて、流石の護佐丸も、北方の防備を撤して、精鋭な佐敷勢と一戰を試みることが出來なかつたやうである。彼は少くとも中山の三分の一か四分の一の兵力を有つてゐたゞらうから、佐敷勢に對して、決して劣勢ではなかつただらうが、不本意ながら、新興の尙巴志と妥協して、祖先以來の强敵北山に向ふのが得策だと思

つたのであらう。もしそれ春秋の筆法を以て論じたなら、彼がこの時主家の仇を報じなかつたのは、非難さるべきであるが、この年は中山が明に通じてから三十五年目、留學生を國子監に派遣し、閩の十八姓が渡來してから十三年目だから、支那思想は、まだ充分にいき渡らなかつたと見なければならぬ。田幸山の彼方で育つた二十臺の青年護佐丸が、儒教的に訓練されなかつたのは、何も不思議ではなく、彼は恐らく四書五經の表紙だも窺いたことがなかつたのであらう。彼は毫も儒教の影響などを受けたことのない、潑剌たる野生の南島人であつた。だから仕方なしに、尙巴志――いはゞその主家の敵――に降つた外樣大名なる彼が、たとへ後で姻戚の關係が出來たとはいへ、後日阿摩和利の率ゐる官軍に征伐されて、一矢を放たないで、自殺する筈があるだらうか。あの「毛氏先祖由來記」の記事が、眞赤な嘘だといふことは、これでも能くわかるだらうと思ふ。

それは兎に角、尙巴志の武力と護佐丸の武力とが合體したので、もう沖繩の大勢は定つて了つた。『異本毛氏先祖由來記』に、

山田城より、讀谷山地方は、中山第一の關所に而候故、永樂八九年の比、（中略）護佐丸右要害鎭守の爲、被封讀谷山按司、其地江城を相構候。此城者國中竝鬼界大島杯寄夫に而作立、近年迄何島之積石と石垣段端抔に銘爲有之由候。

といふ記事があり、『毛氏先祖由來記』にも、大同小異の記事があるが、これには、外に、

護佐丸は德行篤く、仁政を被施候付、百姓業を安んじ、間切内之靜謐は勿論、擧國之人島々抔よりも深く尊信爲レ有レ之由。

と、儒教的の文句まで書添へてある。これで見ると、第一尙氏が勃興してから五六年後、卽ち永樂八九年の頃（我が應永十六七年、西曆一四一〇――一一年の頃）北山に對する作戰上の都合で、護佐丸が、父祖以來の居城であつて、產湯をつかつたなつかしい山田城を放棄して、座喜味の天險まで退却したことがわかる。當時、三山統一の大望を有つてゐた者は、ひとり尙巴志ばかりでなく、北山王の樊安知も亦、さういふ野心を抱いて、その準備に忙はしかつたといふから、中山に取つては、左翼なる「ニシジユク」の關門山田城は、右翼なる「ヒガジユク」の關門美里具志川方面との連絡はいゝが、後に田幸山の森林を控へてゐて、後方との連絡が困難なので、退いて、田幸山を越え、その入口の邊に、要害の地を卜して、戰線を整理する必要があつたのであらう。

長い間、讀谷山の郵便局長をしてゐた當山忠次郎翁――土地の人はこの人のことを郵便當山といつてゐる――の話によると、讀谷山には、護佐丸は座喜味城を築いたが、其處には住まないで、中城に引越したといふ口碑があるさうだが、さうすると護佐丸は、北山が滅亡すると間もなく、中城に移されたと見なければならぬ。私は二三年前、座喜味城址に遊んで、考古學的調査をしたことがあつたが、其處には、私が、明治四十一年の夏、浦添城で發見したやうな銘文式型押の瓦――伊東博士の研究で、近衞天

皇の仁平三年の癸酉に、高麗瓦匠によつて製造されたことがわかつた。――の破片を少しも發見することが出來なかつた。その後この瓦と同一のものが、首里城の一隅からも發見され、勝連城からも、山田城からも、發見されたが、さういつたやうなものが座喜味城で發見されないのを見ると、城郭が漸く出來上つて、建物がまだ出來ない中に、護佐丸は中城に引越したやうな氣がする。

永樂八九年から北山城の陷落までには、五年位も間があるから、座喜味城の城郭が、五年もかゝつて出來たのは、今日から見ると、少々長過ぎるやうな氣もするが、三百八十年前、尙淸王の時代に、首里城の東南の「御いしがきのねたてのながさは二ひろあつさは五ひろたけは十ひろなげは二百三十ひろにつみみちへて御くらともにげらへ申候」時は、二年一ヶ月を要し、（「添繼御門の南のひのもん」參照）同じ時代に、倭寇に備へる爲に、「やらざもりぐすく」を築いた時にも、一年七ヶ月を要した（「やらざもりぐすくのひのもん」參照）とあるから、五百年前、あれだけの工事をやるには、五年位はかゝつたに相違ない。「毛氏先祖由來記」に、「讀谷山築立之砌に、鬼界大嶋其外諸離島よりも人夫寄來、山田城の積石持越、爭ひ積爲仕段云々。」とあるところを見ると、この工事は、單に護佐丸家の工事ではなく、國家的大工事であつたことがわかる。

三山統一の準備を調へつゝあつた樊安知に取つては、この防禦工事が完成しない中に、中山を攻擊するのが好兵法であつた。果然彼は應永二十三年（西暦一四一六年）の三月の初め頃、中山征伐の動員令を

下した。この時、羽地按司が、樊安知に裏切りして、飛脚を以て、之を中山に密告したので、尙巴志は機先を制して、浦添按司、越來按司、讀谷山按司（護佐丸）の三將に命じて、迅速に北山に進擊させた。思ふに、この「うらおそひ按司」は、佐敷以來の勇將にして、中央部の總督に封ぜられた者で、この時の總指揮官みたいなものであつたらう。世鑑及び「異本毛氏先祖由來記」の記事を總合して見ると、二千人近くの中山の軍隊は、三月の十一日、首府を發して、翌十二日、名護に到着したが、名護羽地國頭の軍勢も來り會したので、卽日部署を定めて、今歸仁に向ふことになつた。そして「うらおそひ按司」國上按司、羽地按司は、大手の大將として二千七百人を率ゐて、羽地の寒天那から、大船二十餘隻で押しかけ、越來按司讀谷山按司は、搦手の大將として八百人を率ゐ、名護按司を嚮導として、間道から進擊し、十三日から總攻擊を開始して、三晝夜の激戰の後、彼等は遂に今歸仁城を攻落すことが出來た。が時間の點から見て、當時そんなに早く、今歸仁まで行けたか、又人口の點から見て、當時そんなに多く軍勢が集められたか、その邊のところは少々疑問だが、兎に角この戰爭は、沖繩の戰爭中で、最も大きくて最も激しいものであつた、と見なければなるまい。

樊安知は、三山統一の大志を抱いてゐたといふのに、その首府を羽地か名護邊に移さないで、半島の奥深く、今歸仁の山城にぢつとしてゐたのは、愚と云はなければならぬ。

半島の入口を支配してゐた羽地按司に背かれては、彼は最早囊中の鼠も同樣である。名護按司と國頭

按司とは、兼ねてから羽地按司と氣脈を通じて、時機の到來を待つてゐたに相違ない。かうして、彼等と中山の聯合軍の攻擊を受けて、三山統一の夢を破られた樊安知は、僅少の兵を以つて山城を死守し、時々出でゝ、中山勢をなやましたが、足下から本部大原の如き裏切者を出して、その沒落を早め、空しく遺恨を受劒石に止めて、自殺しなければならないやうになつた。

この時搦手の大將の名が、越來按司、讀谷山按司といふ順序になつてゐるが、この讀谷山按司は、とりもなほさず護佐丸のことで、全軍切つての軍事的天才であつたらう。こゝでは勿論副大將のすがたになつてゐるものゝ、越來按司は、年長者か譜代大名であつたために、名義上彼の上に置かれてゐる迄で采配はむしろ彼が揮つてゐたのであらうと思はれる。彼はこの時まだ三十臺の青年であつたから、父祖の敵を討つて、さぞ欣喜雀躍したことだらう。けれども凱旋して還るや否や、彼は五年間もかゝつて築いた堅城に居ることを許されないで、中城に國替へをされたのである。數年前與儀實禎氏が、讀谷山に出張したとき、聞いて來た口碑に、この時彼の部下の山田大主が、それは非常に危險な事であるから、此處にぢつとしてゐたがいゝといつて諫めた、といふことがあるが、能く考へて見ると、尙巴志にとつては、戰勝の將軍を首府を距ること遠い要害な地に置いておくことほど、危險なことはないから、當時二十六歳であつた二子の尙忠を今歸仁城に駐在させて、北山の遺民を監視させると同時に、護佐丸を中部の中城にもつていくのが、安全の策であつたらう。けれども護佐丸にとつては、これがそも〳〵不幸

の初まりであつた。

護佐丸は中城に移つて座喜味城よりも一入堅固な城を築いた。彼が一かどの築城家であつたことは、座喜味城や中城城を見た人は、誰でもなるほど〳〵頷くに相違ない。今から七十三年前（西暦一八五四年）米國の水師提督ペルリは、沖繩滯在中、一日中城城に遊んで、この古城趾を測量し、徐ろに南島の古英雄を弔ふたことがあるが、これはペルリ一行中のジョーンズ君が畫いた同城趾の平面圖を一瞥したら、能くわかるだらうと思ふ。ジョーンズ君は、城壁の材料は石灰石であつて、その構造は賞讃に値すべき石工術であると云つてゐる。それから石材の中には四呎立方のもあつて、セメントがなかつた時代に、よくもこんな堅牢なのが出來たといつてゐる。特にその拱門（アーチ）が、巧妙に出來てゐるのには、舌を卷いてゐる。この城も完成するまでには、恐らく五六年位の歳月は要したであらうと思ふ。こんな堅固な、外様大名の城が、王城を距る二里近くの所に出來たのは、尙巴志にとつて威嚇にならなかつただらうか。後日この城の擴張が問題となつて、護佐丸征伐の口實を與へたところに、隱れた事情があつたやうな氣がする。

こんなところから私は、首里遷都について、臆測を逞しうして見ようと思ふ。東恩納文學士が言はれたやうに、尙巴志にとつて、都を首里に移す必要があつたとしたら、この頃が最も適當な時機であつたらう。中山城が陷落した時には、島添大里の城や、豐見森城の如き昔の南山の支城は、最早尙巴志のも

のとなつてゐたから、首里を首府にしても、何等危險なこともなかつただらうが、中原に出たばかりの尙巴志は、中山の按司部の處分法や、その遺民の懷柔策を講ずるに忙はしく、その上北山に對する防禦工事もやらなければならなかつたので、遷都の事業に着手することは、到底出來なかつたらうと思ふ。ところが最早北山に對する心配がなくなつて、重荷を卸したので、浦添城には譜代大名を置いて、中城を牽制させながら、都を首里に移して、おもむろに南山征伐の計畫に着手し、傍、那覇港の築港を急いで、日本支那及び南蠻との貿易を盛大にすることを考へたに相違ない。これには何等史料の徵すべきものなく、さうであつたと容易く斷定することは、出來ないが、たゞ當時の事情を總合して、まあこんなところではなかつたかと考へて見たのである。序でにいふが、琉球の上古史を研究すべき史料は、至つて少いのだから、今後浦添城及びその附近の考古學的研究を盛んにしなければ、駄目だと思つてゐる。この邊のところは、鎌倉芳太郎君等の熱心な研究に俟つ外仕方がないと思ふ。

三

北山に對する戰後經營が、漸く緒に着き、南山に對する軍備が、全く調つたので、北山を征伐してから十四年後卽ち永享元年(西曆一四二九年)に、尙巴志は、遂に征南の師を起した。恰も南風に帆を孕ませて江河を下るが如きものであつたらう。この時の諸將の名は、「佐銘川大ぬし由來記」に、

美里大比屋御事、後按司に御昇（おのぼり）、美里按司と云。御子城間按司平田大比屋御事、南山と合戰の時、かくり矢（流矢の事）に當て、討死被召候、云々。

とあつて、尙巴志の甥の城間按司の名だけしかわかつてゐないが、當時五十近くになつてゐた護佐丸も多分出征したゞらうと思はれる。この時南山の領土は大部蠶食されてゐたやうだから、中山勢を支へることは到底出來なかつたに相違ない。「球陽」に、南山では最後の王他魯毎の政治ぶりが餘程惡かつたので、諸按司中、背いて中山に降るものが多く、その上方々に反亂が起つたのを、尙巴志が聞きつけて、早速兵を進めたといつたやうな記事があるのと、「遺老說傳」に、南山王は南山城外にあつた嘉手志井（かでしかは）と尙巴志がもつてゐた金の屏風とを交換した爲に、其の沒落を早めたといふ傳說があるのと、總合して考へて見ると、南山は中山勢を支城で喰止めることが出來ないで、籠城しなければならないやうになつた……が、たうたう水攻めにあつて、容易く陷落しただらうと思ふ。

別に記錄等に書いてあるといふ譯でもないが、この時の戰爭には、馬等も盛んに利用してゐたやうな氣がする。沖繩語では馬はやはりウマといつてゐるが、オモロには、その異名に、ミチヤ、ハヤミヤ（俊馬）ツマグロ（蹄黑）アショチヤ（足四）などがあつて、いろ〳〵と歌はれてゐることは、前にも述べて置いた。そして「明史」や「球陽」を播いて見ると、明初から、僅々二十七年間に、中山から支那に二百匹近くの貢馬がいつてゐるから、三山時代には、沖繩島の中部には、かなり澤山の馬が繁殖してゐたわけ

である。私の十歳位の時には、嘉手納に馬牧（うままち）といふ牧場があつて、澤山の馬が飛んだり跳ねたりしてゐた。北山征伐の時には、地勢上どうだつたかわからないが、南山征伐の時には、中山の軍隊では、確かに馬を利用してゐたに相違ない。當時は大將株の連中が、身に甲冑を着けて、あのオモロに歌はれた「知花（ちばな）おわる日眉美（めまゆきよ）ら按司（あぢ）」のやうに、黑栗毛（くりげ）の逞しきに跨つたばかりでなく、下士格の者にも騎馬の者が居ただらうと思ふ。歩兵以外に、いくらか騎兵がゐたやうな氣もする。

これから護佐丸の運命がどうなるかといふことを述べなければならないが、南山崩（なんざんくづれ）の挿話（エピソード）を一つお話してからにしよう。

南山王の後裔なる首里の阿姓前川家の家譜に、かういふことが見えてゐる。南山王が捕虜となつて誅された時、その弟の阿衡基南風原按司守忠は、兄に殉しようと定めてゐたが、不圖祖先の祭を絶やしてはならない、と氣がつき、圍を敗つて、間道から具志頭に落延びた。そしてその舊知の安里大親に身を寄せてゐたが、數ヶ月たゝない中に、その事が尙巴志に知れて、征討軍を差向けられたので、安里大親の言に從ひ、闇夜に乘じて、與那原に遁れ、一隻の山原船が居たのを幸ひ、それに乘つて山原に行き、久志間切汀間村に隱れてゐた。數年の後、彼はこつそり歸つて來たが、この時大親は歳頃になつてゐた娘を彼に妻せて彼を嗣子にした。その間に男の子が出來た。これがとりもなほさず阿擢辛花城親方守知である。守忠は死んで、白泉の洞窟に葬られたが、後那宇島の地に改葬されて、その墓は今に存してゐ

る。守知は長じて、具志頭村の屋富祖大屋の女を娶つて一女を生んだが、この女が知念間切同村の謝氏知名親雲上成良の妻となつて女子を生んだ。これが卽ち尙眞王夫人で、後に尙淸王を生んだ人である。我が一族はそのお蔭で出世した云々。第二尙氏の初期に、第一尙氏に亡ぼされた連中の子孫が、だんだんと探出されて、優遇されたのは、少しく注意すべき點ではないか。

四五年前私は、南山の王子が落延びたといふ間道を通つて、具志頭村に行つたことがあつた。大里の村はづれからすぐ森林みたいな所に這入るが、坂を登つて暫く歩くと、八重瀨嶽の山脈の背に添うて、一帶の松林が東に向つて走つてゐる。この松林の中の薄氣味惡い細路を一時間半も歩いたかと思ふ頃、私は安里大親の村に出てゐた。それから私は、具志頭の字に、傳說に明るい物知りの婆さんを訪ねて、南山崩の話を聞かせて貰つた。老婆の話をかいつまんで見ると、かうだ。

南山城が陷落した時、若按司（ワカアヂ）の守役（ヤカー）の謝嘉比（ジヤカビ）は、當時五六歲位の若按司を脊負つて、例の間道から自分の鄕里の具志頭同村まで落延びた。そして自分の家に、地下室を造つて、若按司を隱してゐたが、そのことが間もなく近所に知れて、首里王府の搜索を受けさうになつたので、謝嘉比は深夜若按司を脊負つて、港川に逃げた。幸ひ、そこを出帆しようとする一隻の山原船がをつたので、その船頭に賴んで、若按司を久志に連れていつて貰ふことにした。船頭には男の子が無かつたので、之を我が子のやうに可愛がり、歲頃になると、一人娘を妻はせて、之を婿養子にした。二人の子供が出來た頃、若按司は急に

謝嘉比のことが氣になり、妻子に別れを告げて、二十年ぶりで具志頭に歸つて行つた。子供の時分の記憶をたどりつゝ、やつとのことで謝嘉比の家らしい所を搜し出した。暫らく門のところにたゝずんで、二三度家の樣子を窺ふと、物思ひに沈んだ五六十位の盲目の老爺が、人の足音がしたので、瀕に耳を傾けてゐるのであつた。じつと見つめてゐる間にこの老爺の顏が、子供の時に朝夕見てゐた謝嘉比の顏に一致して來たので、若按司は守役！　と呼びながら飛んで行つて、老爺の手を握つて泣いた。老爺も御子！　と呼びながら若按司を抱いて、共に泣いた。後で謝嘉比は、今朝から若按司が見えるやうな氣がして、少しも落ちつかなかつた、と語つて、大人になつた若按司の顏を見ることが出來なかつたのを悲しんだ。謝嘉比には男の子が無かつたので、次女を若按司に妻はせて、後を嗣がせることにした。その間に孫が一二名も出來て、謝嘉比は喜こんだ。この頃その敵の佐敷の小按司の王朝が轉覆したので、一家の喜びは非常なものであつたが、若按司は間もなく螺赤頭(伶人)の募集に應じ、一人首里に登つて、出世することになつた。彼は首里でもいゝ家の娘を妻にして、別に一家を興した。前川家がその子孫である。けれども彼の死後は、その遺言に從つて、遺骸を具志頭間切の白水川の海に注ぐ邊に葬り、後で見晴らしのいゝ所に移した。今の志保志墓がそれである。云々。

これと阿姓家譜との間に、著しい相違が見られるのは、面白いではないか。柳田國男先生はかつて、「文字の無い傳承者は、往々にして此の如く、興味と心持とのみに忠實であつて、結局は時代と環境と

に雇はれて、古い物を作り替へる役を勤めてゐるらしい云々」と云はれたが、南山崩の史實がこの五百年の間に、口から耳へと傳承されていくうちに、こんな風に戲曲化されたのは注意すべきことである。

又、少し横道に這入るが、私は三山時代と現代の沖繩とを、比較して見ようと思ふ。國頭、中頭、島尻、三郡の人民が、心質體質の上から、多少區別されるばかりでなく、土俗學的にも亦區別されるのを見たら、彼の三山鼎立の如きも、亦偶然でないことがわかつて來る。試みに、之を土俗學的に區別して見ると、元來島尻地方の住民は漁業で、中頭地方の住民は農業で、國頭地方の住民は狩獵で、立つてゐたやうに見える。就中强固な社會を組織するに都合のいゝ農業に從事してゐた中部の住民が、眞先に國家を形成したのは當然なことである。はじめ沖繩には幾多の小區分があつて、各部落何れも强者を推して、按司又はちやらとしてゐたが、生存競爭の結果、幾回かの分離合併を重ねて、西曆十四世紀の初葉に至るや、たう〳〵三個の固まりにまで纏つて、三人の「よのぬし」の鼎立を見るに至つた。

前にも述べた通り、狩獵民族なる北山人士は、物質的には惠まれてゐなかつた。けれども强い體格と氣概との持主であつたので、英傑樊安知の統率の下に、不可抗的軍隊となつて、久しく中山を惱ましたが、二三裏切者を出したために、僅三日三夜の抵抗をつゞけただけで、脆くも滅亡して了つた。これは一時平良保一氏の下に訓練された精氣潑剌たる國頭人士が、民友派を統率して、既成勢力を威嚇してゐたが、當山久三氏外二三子の裏切りによつて、急に破滅に近づいたのと似通つてゐるやうな氣がする。

進むに長じて、守るに拙なる點は、今も昔も變つたことはない。けれどもそこには、殆ど凡ての先輩が買收されて了つても、最後の一人まで戰つて見せるといふ青年運動が殘つてゐることを、知らなければならぬ。

ひるがへつて、漁業民族なる南山王國を見ると、やはり物質的には惠まれてゐなかつたが、その民は個性が比較的強く、從つて利己主義に傾いてゐのたで、一時統一はされたが、漸次動搖して、佐敷及び島添大里の獨立となり、遂に下しまじりの一部に閉塞されて了つた。けれども中山も長い間、こゝに手をつけることを避け、尙巴志も之を後廻しにして、中山に向つたところを見ると、小さい割に、うつかり出來なかつたといふことがわかる。それから南山王が嘉手志井を尙巴志の金の屏風と交換した爲に、南山の人民が飲料水に困つて、已むを得ず尙巴志に從つたといふ遺老傳の傳說も、多分南山の按司部が相互の利益關係が薄らいだ頃、尙巴志が撒いた黃白の力で、買收されて、南山の滅亡を來たしたことを意味してゐると思ふ。これは數年前高良隣德氏によつて、漸く、統一されようとしたが、彼の死後は方方に一癖ある人物が割據して、相互の利害關係で、やつと結付いてゐる島尻郡の現狀に髣髴たるものがあらう。O氏やG氏等の財力が竭きる時、否彼等の十倍百倍の財力を有する輸入候補が同郡に入る曉、同郡は、最早彼等のもので無いやうな氣がする。さういふ時、そこには、最後の南山王他魯毎が大敗して門に入らうとした時、櫓の上から箭を放つたり、門を閉ざしたりして、入るのを拒んだやうなことが

起るであらう。

兩者の間に狹まつた農業民族なる中山を見ると、物質的に惠まれてゐた爲に、前後に二山を控へて久しくもちこたへてゐたが、北山の如き氣概と、南山の如き敏捷とがなかつた爲に、尙巴志の不意討にあつて、容易く城を開け渡し、その柱石ともいはれた護佐丸の如き少壯の武將も之と妥協して、その三山統一を援助するの外なかつたのである。縣會毎に、中頭郡の議員及び有志が、島尻國頭二郡の議員その他を相手取り、東奔西走して、寧日のない有樣を目擊したら、古今の著しい類似に驚くであらう。同郡の一大勢力なる年若いI氏が、他日苦しまぎれに、外來の大勢力と、露骨に言へば、輸入候補と妥協して、護佐丸の二の舞を演じなければ、仕合せだが。

私は少々喋り過ぎたやうな氣がする。これから、護佐丸が中城へ引越した後のことを考へて見ようと思ふ。『異本毛氏由來記』には、

護佐丸御事、最初讀谷山之地江被成御座候處、尙巴志樣御舅に御座候故、尙巴志樣被地遠路之思召を以、王城近く、中城の地方拜領被仰付、中城按司と被封候付、亦以其地江構城郭候。

とあつて、護佐丸が尙巴志の舅になつてゐるが、これは間違ひだらうと思ふ。尙巴志は三十二歲にして兵を擧げ（中山征伐）五十七歲にして三山を統一した（南山征伐）といふから、護佐丸よりはずつと年上だらうと思ふ。それに、尙巴志には、中山征伐の時、十五歲になる尙忠といふ次男もあり、これが北山

征伐の時（西暦一四一六年）卽ち護佐丸が中城に引越した頃には、もう廿六歳になつてゐたから、護佐丸の娘を尙巴志自身が貰ふ筈はない。當時護佐丸が三十臺としたら、十歳位の娘があることになり、四十臺としたら、二十歳位の娘があることになるが、この時四十臺としたら、これから長祿二年、（西暦一四五八年）のその沒落までは四十三年もあるから、さうすると、其の時彼は八十歳以上になる譯で、三子の盛親を生んだばかりの人としては、餘りに年を取り過ぎることになる。彼の年が中山城陷落の時に二十臺、北山征伐の時に、三十臺と推考したのは、かういふところから割出したのである。だから、これは護佐丸の娘を尙巴志が其の子に貰つてやつて、姻戚の關係をつけたといふ位に解した方が穩當だと思ふ。『毛氏先祖由來記』には、

護佐丸公一人之御娘御座候處、容顏美麗之上、尤賢德に被二寵在一、尙泰久王聞召、遂に被召而王妃とし玉ふ。

とあつて、護佐丸の娘が、尙巴志の第七子（世譜などには第五子と出てゐるが）尙泰久の妃になつたとある。尙泰久は神號を那之志與茂伊文（なのしよもい）は大世主（おほよのぬし）といつて、應永二十二年（西暦一四一五年）卽ち北山征伐の前年に生れてゐるから、南山征伐の時には、十六歳になつてゐた。多分彼は十七八歳の時、卽越來王子時代に、同じ年頃の護佐丸の娘と結婚したのだらう。そしてその間に出來たもゝとふみあがりが、阿摩和利の夫人になつてゐるから、阿摩和利征伐から五年前に卽位した尙泰久が、王位に卽いてから、護佐

丸の娘を貰つたといふこの書き方は穩當ではない。

戰國時代には、どこの國でも、結婚政策をやつたものだが、尙巴志も、その武力統一を援助してくれた外樣大名（とざまだいみやう）の護佐丸と、姻戚の關係をつける必要を感じて、三山統一後間もなく、之を實行したものと見える。彼は秀吉が家康を憚つたやうに、護佐丸を憚つてゐたに相違ない。南山征伐の翌年、彼は使を明國に遣はして、三山の統一を報告し、又使を室町幕府に立てゝ、久しく斷絕してゐた日球の交通を恢復し、海外貿易を盛んにして、力を專ら戰後の經營に注いだが、南山征伐より十年の後、卽ち永亨十一年（西曆一四三九年）に、三十六島を攻城野戰の間に生長した子弟等に委ね、六十七歲を一期として、空しく白玉樓中の人となつた。

尙巴志の世子には、佐敷王子といふのが、居たが夭折でもしたのか、北山の監守となつて、長い間今歸仁城にいつて居た次男尙忠が、父の後を嗣いで、「琉球國のよのぬし」となつた。そして三男の具志上王子が、その代りに、今歸仁城に行くやうになつた。四男に八重瀨の城主といふのがあるが、これは多分南山の監守ではなかつたかと思ふ。尙忠は卽位後僅四年にして死し、その世子の尙思達が立つたが、これもまた卽位後四年にして死んだ。尙思達には嗣子がなかつたので、尙巴志の五男の尙金福が立つたが、これも亦卽位後四年に死んで、世子の志魯が立つやうになつた。この時、その叔父卽ち尙巴志の六男の布里が王位を覬覦した爲に、雙方の間に、爭鬪がおつぱじまつて、二人共傷ついて斃れたので、御

鉢はたうとう第七子の越來王子尙泰久に廻つて來た。

口碑によると、尙巴志は骨格が逞しく、その上負けず嫌ひの人であつたといふから、この體質と氣質とは正しくその子孫に遺傳したと見なければならぬ。おまけに彼等は戰爭といふ雰圍氣の中で生長したので、この特徵を尙更發揮したに相違ない。この特徵は五百年後の今日、なほその子孫の中に發見することが出來るやうな氣がする。彼等は大方那覇市の助役法學士小嶺幸慶氏に之繞(しんにう)をかけたやうな體格と氣概との持主であつたらう。

三度の飯よりも戰爭が好きで、而も人の下風に立つのが嫌ひな連中の寄り合ひだつたから、僅々十五年の間に四回も國王が代り、その上王位繼承の小亂などがあつたのは何も怪しむに足らないのである。その間には、きつと毒殺又はさういつたやうな事が盛んに行はれたやうな氣がする。そして志魯と布里とがそれを最も露骨に發揮したのではないかと思ふ。

かうして、その骨肉が、或は病死し、或は變死し、或は戰死して、尙泰久がたつた一人殘るやうになつた。この時彼は、四十歲だつたが、自分が「琉球國のよのぬし」になつて、父祖の征服國家を承繼がうとは、夢にも見なかつたであらう。彼の外舅なる老將護佐丸も亦事の意外に驚かされたに相違ない。この時、自分の藩屏ともいふべき佐敷以來の名將は、或は戰死し、或は老衰して、自分は外樣大名なる護佐丸の擁護に委ねなければならなくなつた尙泰久は、一入心ぼそく感じなかつただらうか。『毛氏先祖

由來記』の護佐丸の娘が尙泰久の王妃になつたといふ記事の次に、

茲に因つて、護佐丸公の城は、王都遙遠、音信疎く、特に勝連按司阿摩和利、權威を振ひ候付、彼を防禦之爲、中城の地方を被レ賜、城郭を造、遷居被二仰付一、中城按司江爲レ被レ封由候。

といふのがあるが、これは、北山征伐が濟んだ頃の事件とそれより四十二年後尙泰久卽位の頃の事件とをごつちやにした記事で、護佐丸が阿摩和利を牽制する爲に、中城に移されたので無いことは、誰にも氣が付くことゝ思ふ。

『夏氏先祖由來記』に、

去る程に、尙泰久王、阿摩和利の能才、人に過ぎたる由聞し召し、卽ち婚姻を約して、一家のよしみを結び玉ふ。かくて後日、翁主踏揚(ふみあがり)按司、勝連按司に嫁ぐ。

といふことがあるが、これは王が、この頃、突如として勝連半島に勃興した一勢力と、新たに姻戚の關係をつけて、中城を牽制したことをほのめかしてゐるだらうと思ふ。阿摩和利のことは、『古琉球』にくはしく述べて置いたから、こゝでは簡單に述べることにする。が、「おもろさうし」の十六の卷勝連具志川のおもろさうしの七章に、

一かつれんわ、
てだ、むかて、

ぢやう、　あけて、
まだま、　こがれ、
よりやう、
たまのみうち
又きむたかの、
月むかて
又かつれんわ、
けさむ、　みやも、
あんじ、　ゑらぶ

といふのがある。これには、勝連城は、日に向つて、門を建てゝ、眞珠黃金、寄り合ふ玉の御殿ぞ。俊れたる阿摩和利は月に向つて、門を建てゝ、勝連は、古往今來、按司を選び、良主を得、といふほどの意味がある。これは堅城を控へ、名主を戴いた喜びをオモロの詩人が歌つたものだらうと思ふ。又二十二の卷の二十章に、

一もゝと、　ふみあがりや、
けさよりや、　まさり
もゝちやちのぬしてだ、

なりわちへ
又きみの、　ふみ、　あがりや

といふのもある。モヽトフミアガリよ、以前にも優りて、諸の女按司中の女王となられてよ、君のフミアガリよ。といふことである。これも例の詩人が、モヽトフミアガリが、勝連に嫁いだ時のことを歌つたのであらう。かうして、彼女は、王昭君が胡國に嫁いだやうに、勝連城に嫁いだが、この時、彼女には、鬼大城といふ警固の武士が一人附いていつた。例の「かつれんのおもろさうし」の六章に、モチヅキといふ女を歌つたのがあつて、それに「かつれんのあまりおなぢやらを申也」といふ註があるのを見ると、阿摩和利にはモチヅキといふ先妻があつたことになるから、彼が政略上、彼女を離緣して、この王女を迎へたといふことがわかつて來る。

モヽトフミアガリは護佐丸の娘と尙泰久との間に出來たのだから、護佐丸と阿摩和利との間にも姻戚關係がついたわけである。尙泰久は、卽位の時に、四十歲であつたから、彼女はこの時二十歲前後であつたと見なければならぬ。そしてこの時彼女の配偶なる阿摩和利の歲は三十歲から四十歲までの間と見たら、大過はなからう。北山征伐から阿摩和利の沒落までは、四十二年も間があるから、護佐丸が中城に引越した頃、阿摩和利は、まだ生れなかつたか、生れてゐたとしても、ほんの鼻垂れ小僧であつたらう。して見ると、「毛氏先祖由來記」の勝連に對抗させる爲に、中城城を築いたといふ記事は、年代を無

視したものだといふことが明白になつて來る。流石に史實を重んじた「異本毛氏先祖由來記」には、さういつたやうな記事はない。尙泰久は、兎角、この新舊の兩勢力をうまく利用して、互に牽制させたに相違ない。骨肉でさへも信ずることが出來なかつた戰國時代のことだから、彼がこの新舊兩勢力に對して、絶えず眼を光らしてゐたことは、想像するに難くはない。

『夏氏由來記』に、

是より阿摩和利、身儀賓の首にゐて、彌逆威を振ふて、常に諸按司を見ること草芥の加く、驕り傲ること甚暴にして、既に君位を奪ふの志あり。

とあるが、恰度佐敷の小按司尙巴志がユックサ坂の絶頂で、三山の統一を夢想したやうに、かつて望月按司の壓制から勝連半島の民を救つた阿摩和利も、亦「琉球國のよのぬし」になる野心を起したのである。思ふに、百按司は勝連按司の鼻息を伺つてゐたらう。彼は實に、オモロに所謂、「按司の又の按司」であつた。「勝連のおもろさうし」の十八章に、

一かつれんは
なをにぎや、
たとゑる、
やまとの、

かまくらに、
たとゑる
又きむたかわ、
なほにぎや。

といふオモロがある。勝連は何處にか譬へむ、日本の鎌倉に譬へむ、あはれ俊れたる阿摩和利は、誰にかは譬へむ、といふことである。この頃には、日琉の交通が頻繁になつて來て、昔の京都と鎌倉との關係が、沖繩の都鄙に知れわたつてゐたと見えて、今一つ彼を謳歌したオモロに「きや、かまくら、これど、いちへ、とよま」（鄙も都も、彼をぞ稱へて、謳はむ）といふ詩句もあるが、阿摩和利は、兎に角、勝連を鎌倉幕府のやうな位地に進めつゝあつたのである。第一尚氏の王朝が衰運に傾いて來た時であつたから、彼の計畫は、あながち空想とも言へなかつた。

ところが、彼の前には護佐丸の武力が控へてゐたので、彼は容易く兵を動かすことが出來なかつた。世譜以下の史籍には、護佐丸は夙に、阿摩和利の異志を看破して、城郭を擴張し、士馬を訓練し、兵器を製造して、緩急に備へてゐたが、これが却つて、阿摩和利に乘ぜられる動機になつた、といつたやうなことが見えてゐる。或日、阿摩和利は小舟に乘つて、與那原の濱に上陸し、直ちに王城に參内して、護佐丸が王朝顚覆の陰謀を企てゝ、軍備を整へてゐる際中である由を讒言した。王は最初半信半疑であ

つたが、試みに密偵を遣はして、護佐丸の動靜を窺はせたら、城内が如何にも物騷である、との報告を得たので、大いに驚いて、特に阿摩和利を大將とし、直ちに官兵を發し、暗夜に乘じて、中城を征伐させることにした。この間には、いづれ一兩日の日時は要しただらうから、首里城中に、護佐丸に對して同情を有つてゐる者があつて、私かに之を漏らしたとしたら、護佐丸はゆつくり戰鬪準備をして、官軍を逆擊つたに相違ない。萬一さういふことがあつたとしたら、この日が恐らく尙巴志紀の最後の頁になつてゐたであらう。

當時首里と中城との間に、何等の確執がなかつたとしたら、よし阿摩和利に鹿を馬となすの辯舌があるとしても、尙泰久王が暗愚でない限り、あゝいふ讒言が、容易に信ぜられるものではない。然るに、それがたやすく信ぜられたところを見ると、そこには、自ら二つの疑問が起つて來なければならない。この征服國家の衰頽期に際して、護佐丸が前王朝の回復を計つたのではなかつたか、それとも、尙泰久が、漢の高祖や源頼朝のやうな征服國家の君主と共通な心理を有つてゐて、その王朝建設に與つて力のあつた外舅を疑つてゐたのではなかつたか、その邊のところは何れとも斷言は出來ないが、この頃護佐丸が、尙泰久に敬遠されてゐたことだけは事實に近いかと思ふ。饗宴の最中、不意打を喰つて、非命の死を遂げた老父の心事を想うて、王妃は定めし慟哭しただらうが、阿摩和利の捷報に接した王は微笑を禁じ得なかつたであらう。そして、京の内では、早速戰捷祝賀の宴が張られたであらう。『おもろさうし』

の二の卷中城越來のオモロの四章に、

一きこゑ中ぐすく
げさや、つのひらせ、
いみやは、せめて
うたん、なかくすく
又とよむ中ぐすく

といふのがあるが、これはとりもなほさず、護佐丸征伐を歌つたのである。「つのひらせ」の一句だけはどうしても解せないが、前後の關係から見ると、全體の意味は、名高い中城！　昔は目の上の瘤であつた中城を、今は攻めて擊たう、威名嚇々たるこの中城を、といふことだらう。かうして、この征服國家の勃興と密接な關係を有つてゐた武力は、一夜の間に、その影を隱して了つた。

この時、護佐丸の長男と次男とは、最後まで奮戰して父に殉じたが、生れたばかりの三男の盛親は、乳母に抱かれて、漸く虎口を逃れ、南山に落延びて、その豪族國吉大親に身を寄せた。七十歳近くになつて、子を擧げたところから見ても、護佐丸に壯者を凌ぐ元氣のあつたことがわかるやうな氣がする。それから中山の密偵が國吉大親の邸宅の邊を徘徊したので、この子には五六歳の頃まで女の子のやうな裝束をさせてゐたが、十一二歳の頃に、第二尙氏が勃興して間もなく、探出されて、禁中で養育された

といふことである。兩由來記に、護佐丸の死後、その寃罪がわかつて、尙泰久が後悔したといふことがあるが、果してさうであつたとすれば、その孤子の盛親は、その時取立てられてゐなければならないのに、少しもさういふ恩典に預からないで、次の王朝の初期に取立てられたのは、不思議といはなければならぬ。これだけで見ても、護佐丸に對する誤解が、この王朝の最後の日まで、解けなかつたことは明白である。

さて、阿摩和利は、目の上の瘤をたやすく除くことが出來たので、大急ぎで、勝連に歸つて、首里征伐の議を凝らしたが、城中には、モヽトフミアガリと鬼大城とが居り、而も近頃二人の關係が少し怪しいと思はれる節もあるので、まづこの二人を片付けてから、首里城を不意擊するつもりでゐたらう。けれども二人に感づかれて、逃げられたので、彼の作戰計畫は齟齬して了つた。首里では、阿摩和利が押し寄せて來る迄に、かなり間があつたので、「首里の武士、精鋭なる武士」を召集して、ゆつくり待ち受けてゐた。阿摩和利も時を移さず、軍隊を召集して、首里に押し寄せて來た。彼は一旦首里城を圍んだが、準備が足らなかつた爲に、たうたう鬼大城の逆擊にあつて、勝連城邊海浪激し松風荒む所に、空しく逆臣の醜名を無期に傳ふるに至つた。鬼大城は勝連城で、盛な血祭をして、目出度凱旋したが、この新興の武力をたゝきつけたといふことで、「王大に大城の勞を稱して、特に紫冠を授け且つ阿摩和利の器物竝に勝連城の門城を悉く大城に賜ふ」た、といふことが夏氏由來記に出てゐる。その上、彼は阿摩和

利の妻であつたモヽトフミアガリと同棲することを許された。

私は三四年前、美里の小學校に、講演しに出かけた序に、鬼大城の墓を見にいつたが、この時或教員から、知花邊の口碑を聞かされたことがあつた。それはかういふ話である。鬼大城は勝連征伐にいく途中で、一寸越來城に立寄つて、自分はこれから阿摩和利を討ちに行くところだが、君も一緒に行つてくれ、と頼んだら、城主は、今朝妻がお產をしたので、手がはづせないから許してくれといつて斷つた。凱旋して歸つた日、鬼大城は、越來按司は、あゝいふ國家の大事件の時、お產にかこつけて、援助をしなかつた、といろ〳〵王に讒言したので、越來按司は早速城を退ひ出されて、鬼大城がその後に這入り込んだが、越來按司は仲泊まで逃げていつて、遂に縊れて死んだ。かうして越來按司になつた鬼大城もその後何か不都合なことがあつて、首里から征伐されたが、支へ切れないで、美里の大村渠（今の知花）の洞穴の中に隱れて了つた。追手の兵はこゝまで追ひつめては來たが、彼は非常な豪傑なので、誰一人生捕りに這入る者がなかつた。已むを得ずその邊の民家を壞はして來て、入口でたきつけたので、流石の鬼大城も窒息して、死んでしまつた。そして彼の死骸は、長い間そこにぶち込まれてゐたが、百何十年か前に、彼の子孫等が、この新らしい墓を造つて、そこに安置することになつた、云々。これは多分事實であらう。勝連の武力をたゝきつけたこの最新の武力も、亦間もなくたゝきつけられたのである。

かうして、第一尙氏の征服國家は、あらゆる武力を片付けて了つて、一時小康を得てゐたが、寛正元

年(西暦一四六〇年)尙泰久王が死んで、その三子の尙德が、「琉球國のよのぬし」となつたので、たうたうその滅亡の時期を早めて了つた。この年若い戰好きな王は、第一尙氏の七王中で、最も剛情で、最も不人望な王であつたが、國家が疲弊してゐるのも頓着なしに、二回まで鬼界嶋征伐の師を起したので、遂に國家を崩壞の危地に引入れて了つた。しかし其處には最早、この崩壞に乘じて、この國家を覆し得る何等の武力も存在しなかつた。が、それは遂に、一魔術師が唱へた呪文(じゅもん)によつて容易く覆されて了つた。恰度獨り手にひつくりかへらうとしてゐる時だつたから。

今まで述べて來たところを一目瞭然たらしめる爲に、私はこの王朝七代六十四年間の小年表を作つて見よう。

西暦	年號	重要事項
一四〇五年	應永一二年	中山征伐、尙思紹卽位
一四一六年	同　二三年	北山征伐
一四二一年	同　二八年	尙紹卒、享年六十七
一四二二年	同　二九年	尙巴志卽位
一四二五年	同　三二年	册封
一四二九年	永享元年	南山征伐

一四三九年	同　一一年	尙巴志卒
一四四〇年	同　一二年	尙忠卽位（巴志の二子）
一四四三年	嘉吉三年	册封
一四四四年	文安元年	尙忠卒、享年五十六
一四四五年	同　二年	尙思達卽位（尙忠の嗣子）
一四四七年	同　四年	册封
一四四九年	寶德元年	尙思達卒、享年四十二、無嗣
一四五〇年	同　二年	尙金福卽位（巴志の六子）
一四五二年	享德元年	册封
一四五三年	同　二年	尙金福卒、享年五十六、王位繼承の小亂
一四五四年	同　三年	尙泰久卽位（巴志の七子）
一四五六年	康正二年	册封
一四五八年	長祿二年	護佐丸征伐、阿摩和利征伐
一四六〇年	寛正元年	尙泰久卒、享年四十六
一四六一年	同　二年	尙德卽位、第一鬼界島征伐
一四六三年	同　四年	册封
一四六六年	文正元年	第二鬼界島征伐
一四六八年	應仁二年	金丸隱退
一四六九年	文明元年	革命、尙德卒、享年二十九

これで見ると、七代六十四年の間に、大小の戰爭が八九回もあり、御冠船卽ち冊封の式典が六回もある。冊封がどんなに費用のかゝるものであるかを能く知つてゐる人は、これが戰爭と殆ど同じ樣に、その財政を困難ならしめたことを了解するであらう。思ふに、この王朝が海外貿易と新領土から得た富の大部分は、その征服慾と名譽慾とのために、蕩盡されたのであらう。それからこの王朝が、尙巴志の死後、間もなく動搖したのは、彼の子孫が被征服者なる三山の遺民の處分法を案出することが出來なかつたのも、手傳つてゐると思ふ。

社會學者の說によると、征服によつて異なつた二種族は、密接な接觸をすることになるが、到底同化することは出來ない。征服者は、常に、被征服者を蔑視し、あらゆる方法を以て、之を奴隷化する。被征者は仕方なしに服從しながらも、征服者の武力以外の一切のものを認めない。こゝに於て、征服者が本當に被征服者を征服し了せんが爲に、社會の諸の制度が生れるとのことである。尙巴志及びその子孫のやり方を見ると、この新らしい統治法に思付くことが出來ないで、あらゆる反逆的行爲に對して、絕えず兵力を動かすやうな統治法を用ひてゐる。そしてそれが彼等の一大負擔になつてゐる。なるほど、一時は勝利の誇りに驅られて、その權威に反對するあらゆる反逆者を片付けたが、後にはやり切れなくなつて、たうたう革命をさそひ出した。第一尙氏の征服國家はかうして經濟的基礎がぐらついた爲に、勃興してから僅六十餘年にして崩壞した。

この頃、首里城中に、金丸といふ役人があつた。伊平屋島の產で、もと越來王子尙泰久の家人であつたが（越來王子は護佐丸の婿であつたから、その家人なる金丸が、當時護佐丸家と往復してゐた事は、推測するに難くはない）尙泰久が王位に卽いた時、內間の地頭に任ぜられ、後拔擢されて、御物城御鎖之側といふ財政竝に外交に關する重要な位地を占めて、怪腕を振つたもので、時の人は、彼を內間御鎖といつてゐた。彼は尙泰久と同年で、而も彼の氣に入つてゐたので、おつつけよあすだべ（卽ち國務大臣）に昇進しようとしてゐたが、尙泰久に死なれて、まだ二十歲にも滿たない腕白な尙德に仕へなければならないやうになつた。

二者は性格の相違から、事每に衝突したといはれてゐる。世鑑に、或年の久高嶋御參詣の歸りに、與那原まで來た時、從者達が、ひもじくて、これ以上はとても步けないから、晝食をとらしてくれと願つたが、自分はまだひもじくないから後で一緖に喰べろ、との王の御意が下つて、一同はがつかりした。內間御鎖が、之を見かねて、專斷で、喰べても差支へないと命じたので、流石の王も苦笑したといつたやうなことが見えてゐる。こんな調子で、彼は何時も王の目の上の瘤になつてゐたらう。口碑にも、王が鬼界嶋を征伐したいと言ひ出したとき、彼は王府財政の窮狀を述べて、思ひ止らさうとしたが、戰好きな王は、その忠言を斥けて、遠征軍を派遣することになつた、といふことがある。兎に角、この遠征軍は散々敗北して歸つて、王の面目はつぶれたが、負けぬ氣の王は無念やる方なく、冊封の大典を濟ま

せてから三年の後、再び鬼界嶋征伐の師を起した。此度は王親ら出征して、軍隊を指揮し、見事に凱旋して歸つたので、王の暴虐はます〳〵甚だしくなつた。

金丸は、その翌々年、いよ〳〵その領邑に隱退した。この內間の隱遁こそは、幾多祕密の伏在するところで、當時の反軍國主義は、此處を中心として、全嶋に漲り、所謂三十六嶋は、ひとりでに、彼の前に轉がつていつた。

危機が近づいてゐることを露ほども知らなかつた王は、その翌年、百官を率ゐて、久高島參詣に出かけた。同島の外間村に、代々祝女を職とする家があつたが、當時家を嗣いだのは、十七八の女で、クニチャサといふ絕世の美人であつた。王が祭典の際、この祝女を見そめて、彼女と戀に落ち、首里に歸へるのを忘れた頃、革命が勃發した。革命黨は王城に闖入して、王妃世子及び王族を虐殺して、早速、京の內で、よのぬし選擧の大會が開かれた。この時、金丸と親交を結んでゐた安里大親が、神懸りして、「食吳ゆ者ど我が御主、內間御鎖ど我が御主」といつたやうに、謠ひ出したら、衆皆ヲーサーレーと和して、「琉球國のよのぬし」は立どころに選擧された。これは所謂ユーウテーといふもので、この言葉は私達の語感には、一種異樣に響くものであるが、古琉球では、革命がある場合には、大方この形式で、主權者の選擧が行はれたとのことである。

ユーウテーとはやがて、「國家の大事件を謠ふ」の義で、豫言者と詩人とを兼ねた社會の先覺者が、神

の宣託を承けて、詩歌の形で、之を民衆に告げることである。かういふことは、さがしたら、日本の上古史中にも、ざらにあるだらうと思ふ。かつて、雜誌「藝文」誌上に掲載された羽田博士の「北方民族の間に於ける巫に就いて」といふ論文中にも、鐵木眞が可汗の位に登つて、成吉思汗の名を稱するに至つたのは、闊々出なる巫の提議によつたといふことがあるが、闊々出も多分、あのクリルタイといふ貴族の大會で、安里大親がやつたやうに、ユーウテーをやつたに相違ない。兎に角、安里大親のことは、巫現は社會國家の上に重要なる役目を持つてゐた者で、その史上の出來事には深い關係を有つてゐるといふいゝ例證になるから、後で詳しく述べようと思つてゐる「（拙著「古琉球の政治」參照）

さて、かういふことが起らうとは、夢想だもしなかつた尙德は、歡樂極まつて、不安を感じ初め、クニチャサと別れを惜しみつゝ、この神祕の小島を見棄てたが、船が數町も進んだかと思ふ頃、一隻の漁船に出會つた。船頭は恐る〳〵王の船に近寄つて來て、「よがわり」がおこつて、伊平屋王が立つに至るまでの一伍一什を物語つた。王は之を聞いて、憤志やる方なく、遂に海に投じて死んだ。これは久高嶋の外間祝女の家に傳承されてゐる口碑だから、いらくらか事實を語つてゐるだらうと思ふ。この時尙德王は、二十九歳の青年であつた。

これから私は、この革命に重要な役割を演じた安重大親が、巫覡のやうな二重人格者であつたかどうかを檢討して見ようと思ふ。大正五年頃、私は初めて護佐丸の後裔なる毛氏豐見城家の支流伊野家から出た『毛氏安里大親由來書』といふ本を見たことがあつた。これはもと安里大親の後裔なる首里市儀保町の毛氏永村家に保存されてゐたとのことで、その內容は、球陽の記事そつくりであるが、この本を手に入れた時、私は伊野波永村兩家に、安里大親が、護佐丸の兄だといふ口碑が遺つてゐるといふことを聞かされて、非常に興味のあることだと思つた。

この由來書の劈頭に、かういふ記事がある。

元祖大安里清信事、素は大城掟と申、泊之住民にて候。一日首里より及二黃昏一乘馬にて罷歸候節、安里橋東表參掛候砌、老人一人行逢、右老人に被二相誘一林中江參候處、高閣有レ之、不レ似二人境一、二老圍レ碁、又童子一人烹レ茶、清信心甚怪レ之、罷歸候節、竊に馬鞭を立置、致二退去一候。其翌日林中江尋參見候得共、何ぞ不審成儀無レ之、昨晩立置候馬鞭計有レ之候。彌怪に存罷在候處、其後清夜に、右場所にて、右之老人に逢ひ、別袖之時、老人より黃金一塊を給、吾汝と緣有レ之故、又以爰に逢候。是則靈地にて候間、致二開地一家を構、可二住居一旨被二相敎一、則老人不二相見一候。此地前は水後は山にて、誠に景色勝地故、平日山水を樂、送二餘歲一候。

この短い記事で、安里大親の心理狀態が、はつきりわかるやうな氣がする。變態心理學上より見ると安里大親は、確に一種の二重人格者であつた。

あの記事中に、安里大親はもと大城掟といつたとあるが、この大城は、とりもなほさず、中城間切の大城村のことで、掟は地頭の義である。近代は掟といへば、村長のことであるが、明の嘉靖頃支那に派遣された役人の役名などに、おきて（掟）てこぐ（文子）などがあるを見ても、又明史に、洪武の頃、琉球から支那へいつた使節の名に甚模結致、嵬谷結致、隗谷結致、壽禮結致（結致はことによるとウキチ若しくはそれに似た發音であつたかも知れぬ）とあるのを見ても、掟に古く地頭といふ義のあることは明である。安里大親は、護佐丸と同じく毛姓で、而も護佐丸の兄だと彼等の子孫たちはいつてゐるから、彼が護佐丸の全盛時代に、その領邑の一部なる大城の地頭に任ぜられたことはあり得べきことである。ところが、護佐丸の沒落と共に、彼も亦其の位地を失つて、當時の國港であつた泊邊を放浪したのである。多分彼はトキ（覗）になつて、口を糊してゐたのかも知れぬ。さうして彼は、この世智辛い世の中を渡るに當つて、切にその話相手を求めて已まなかつたのであらう。かうして、凝り固つた一念は、いつしか彼の潛在意識内に退いて、良友的第二人格となつたのである。彼が黄昏に、安里橋（今の崇元寺橋）の東側で出會つた老人は、まさしくこの良友的第二人格であつたのである。彼はこの第二人格に導かれて、林中の高閣に這入つたが、此處には、ふだん斯ういふ家は無かつたといふことに氣がついて、自分の目を疑ひ始め、たうたう目標（めじるし）の爲に、その戸口に馬鞭を立てゝ歸つた。（この鞭を立てたところは今にマーブチの御嶽（おがん）といつて、崇元寺の本堂の前に遺つてゐる）そしてその翌日改めて、林中に這入つ

て見ると、昨夜立てゝ置いた鞭はその儘立つてゐたが、高閣は見えなかつた。第二人格の作用であるから無論實物があらう筈はない。けれども、この老人は、その後も幾度か現はれて、彼の相談相手になつて呉れた。かうして、彼は彼の第一人格よりも優れた第二人格の指導によつて、首里那覇往復の中間の所に、山を後にし水を前にした勝地を卜し、一軒の家を構へてその餘命を樂しんでゐた。尙侯爵家の菩提寺崇元寺は、實にその跡だと云はれてゐる。彼はかういふ路傍に暮したので、從つて朝夕種々の人物と交際するの機會を得て、能く時勢に通ずることが出來たのであらう。例の由來書に、またかういふことが見えてゐる。

其時、尙圓樣者內間里主と申御鎖之側職にて、度々那覇往來被ㇾ成候處、一日門外にて內間公を奉ㇾ拜候得ば、其貴相誠に龍鳳之御相有ㇾ之候。其後內間公那覇より被ㇾ爲ㇾ歸候節、君位之座席を構、請待にて段々尊敬仕候付、內間公被ㇾ仰候者、貴人にても無之、ケ樣之取持存外之由にて、段々御辭退被ㇾ成候付、貴樣之御相は常人に相替、貴相にて御座候由申上候處、却而御驚被ㇾ遊、早速被ㇾ爲ㇾ歸候故、不ㇾ能二留上一儀、於二門外一相禮仕候。內間公馬に被ㇾ爲ㇾ乘候砌、脚下に一之黃痣有之候を拜付、猶以尊敬仕、公之貴相を申上候者、是誠に其印(しるし)にて御座候由申上候。

尙巴志が三山を統一してから、半世紀も經たない中に、彼の子孫は、軍國主義の弊に苦しみ、尙德の世に至つて、革命の氣分は全沖繩に漲るやうになつたので、豫言者風の安里大親は、早くも之を感知し

て、局面を開展せしめ得可き人物を物色し始めたのであらう。彼は遂にかういふ人物を內間御鎖に於て見出したのである。この時、彼の衷にある例の第二人格が相談相手になつて、探してくれたことは勿論である。彼は惡く言へば、一種の變り者であつた。併しかういふ變り者が事物の眞相をつかむ點に於ては、却つて當り前の人に優る場合があることを知らなければならぬ。かういふ例は歷史上に澤山ある事である。イエスを始めてメシヤと直覺して、神の子イエスよと呼んだのは、鬼に憑かれた人であつた。安里大親が、衆に先んじて、琉球第一の人物を發見したのは、何も怪しむに足らないのである。內間御鎖は、いゝ知己を見出して、往復とも、きつと此處に立寄つたに相違ない。かうして、二人の交際は段々親密になつて、たうたう國事を談ずるまでになつたのである。沖繩縣立圖書館長眞境名安興氏等の著「沖繩一千年史」に出てゐる尙圓王の御後繪(肖像)は、當時の畫家が寫生したのを幾度か寫しかへたので、多少理想化されたところもあるだらうが、それには、政治的天才の閃が多分に現はれてゐるやうである。彼は確かに人を引きつける力を有つてゐたに相違ない。

これから小役人時代の彼を瞥見することにしよう。彼の長兄の大米須の後裔なる首里市大中町の顧氏普天間家の口碑によると、彼の父はもと首里の人で、二人の男の子を擧げた後で、故あつて、伊平屋に渡り、彼の島の祝女によつて、二人の男の子と一人の女の子を擧げたといふことである。そして祝女との間に出來た最初の男の子が卽ち彼金丸であるとのことである。彼は二十歲の時、首里に上つて、越來

王子尙泰久の家人になつたが、その頃彼は、

命果報願は、石の身の如に、首里がおゑか願は、げらいを座敷。

といふ三十字詩を詠じたといはれてゐる。この歌を能く味つて見ると、その中に安里大親がトつたやうな貴人の氣韻が能く現はれてゐるやうな氣がする。この歌について、少々私の考へを述べることにしよう。上句は誰にでも能くわかつてゐることゝ思ふから、別に解釋はしないが、下句はことによつたら、間違つて解してゐる人がないとも限らないから、少し解釋する必要があると思ふ。「首里がおゑか」は古い言ひあらはし方で、沖繩戲曲作者の鼻祖玉城朝薫の組躍「銘刈子」には、「首里のおゑか」と新らしい使ひ方がしてある。そして尙育王の戍の冠船(卽位式の時)のテキストには、やはりさうなつてゐるが、民間に流布する組躍本などには、それが「首里の御位」となつてゐる。之は其後おゑかといふ言葉が、一般にわからなくなつて了つたから、御位にかへて了つたのであらう。金石文にも、役人のことを「おゑか人」と使つてある。地割制度時代に、役人に下さる土地のことを「おゑか地」といつてゐた。「首里がおゑか」は、首里加那志から下さる位階若しくは官職のことで、「げらいを座敷」は三司官座敷若くは最高の位階の意味を有つてゐる。古代琉球語では、げらゑは造るの義であるが、轉じては食物など調理する意にも用ひられ、又上品な言葉をげらい言葉といふこともある。これには、最上のとか、上等とかいふ意味があるから、「げらいを座敷」の意味は、これで判然して來る。これをちよつとした官職の義

に解した人があるが、間違つてゐる。この歌は、金丸が、尙泰久に、お前の理想は何か、ときかれた時に、詠じた歌で、身命は岩石のやうに岩乘で、位階は「よあすたべ」迄漕付け度う御座います、と答へたのだと思ふ。かうして彼の手腕は、夙に尙泰久に認められて、尙泰久が王位に登つた時、內間の里主に取立てられ、おつつけ御物城御鎖之側（王府財政の樞機を總攬し且つ外交に關する重要な職で、三司官になる人が是非通過しなければならない難關）に擧げられて、彼が三十字詩に表現した理想は、實現されさうに見えたが、肝腎な時に、尙泰久に死なれて、暴君尙德に仕へて、七八年間不愉快な生活を送り、たうたう排斥されて、內間に隱退しなければならないやうになつた。彼は伊平屋を逃がれた時、妻子を携へてゐたやうだが、首里に上つて以來、彼等の消息はとんとわからなくなつてゐる。そして彼には、この時、おぎやかといふ二十六歲の若い後妻とその間に出來た四歲になるまあかとだる（尙眞）とがあつたことは明かである。外におとちとのもいがねといふ女の子も生れてゐただらうが、この方はまだ一二歲の乳呑兒であつたらう。金丸の首里での邸宅は、かたのはなの天王寺の所であつたといふから、尙眞王は、首里城で生れたのではなく、此處で生れたと見なければなるまい。西原の內間邊には、刺客が絕えず徘徊したので、內間御鎖は妻子と共に、四五日も林中に隱れてゐたといふ口碑が遺つてゐる。當時の危險思想家等は、大方此處に出入してゐたのではあるまいか。この時安里大親が、どういふことをしてゐたかは、讀者の推察にお任せすることにしよう。

この時のよがはりのことは、世鑑にも詳はしく出てゐるが、こゝには、この由來書のを引用して見よう。

尙德王薨御之御時、諸官人御城御庭江相集、御太子卽位被レ成候儀、被二申聞一候處、法司之威勢を畏、無言にて爲レ答者一人も無レ之候處、諸官の內より白髮の老人立出、高聲にて、國家は萬姓の國家、一人の國家にては無之候。先王尙德の行は惡心無道、臣民を殺、諸人末々迄怨多有レ之候。幸、內間御鎖之側は、寬仁大度、更に恩德及二四方一候。是民之親にて、天より我君を生給候。內間公を君に可仕と申候付、右言葉に應、諸人一同答申候。

これには、革命の勃發が尙德王の薨御の後となつてゐるが、久高島の口碑と照合せて考へて見ると、護佐丸の最期を作りかへたやうに、後世の史家が、故更に作りかへたやうな氣がしてならない。これについては斷定する材料は勿論ないが、何だか尙德王の不在中に勃發したやうな氣もする。前にも述べた通り、この時のユーウテーは闊々出が鐵木眞を可汗を推薦したのと同一轍であるが、舊約聖書を繙いて見ると、猶太の昔でも、國王は多くその豫言者によつて、指名されてゐたやうである。兎角、當時社會情調が立派に出來てゐて、內間御鎖は民衆の等しく崇敬する理想的人物になつてゐたが、國王選擧の大會の時には、誰れも法司(大臣)等の威勢を畏れて、容易に口を開く者がなかつた。ところが安里大親は日本上古史にあるやうに、神懸りして、神の宣託を告げたのである。これは或は最初から仕込んであつ

たかも知れないが、此時彼の良友的第二人格が言はせたのは勿論のことである。彼にとつては、この忠告者は超人的實在者であつたから、その忠告は神の言葉として感ぜられたのである。それ故に、彼は權威をも恐れず、その確信したことを言ひ放つたのである。世鑑には、この場面を、

無レ所憚申たりければ、さしも廣大なる庭に錐を立る處もなく竝居る群臣、一同に許諾しければ、其聲四方の山に響き亘り、暫しは物も聞やらず、爰の時の貴族近侍に召仕はれける高位高官の者共は、東西の門より我先にと落行けば、其有樣は只蜘蛛の子を散すに不レ異、世子は未レ滿二十歲一、七八歲の間に御座ければ、母后や乳母などいだきかゝへ、若やたすかりやするとて、眞玉城へぞにげ隱れたる。軈て武士共追懸、指殺してぞ棄てたりける。

と書いてある。この時、難を免れた第一尙氏一族の者の中には、或は祖先の墳墓の地なる佐敷に逃げたのもあり、或は讀谷山の伊良皆邊に隱れたのもあり、或は玉城の富里當山に落延びたのもあつた。鬼大城の沒落後、首里城中で、孤獨な生活を送つてゐた三十臺のモヽトフミアガリは、この時、玉城に逃げたと見えて、富里當山には彼女の墓が遺つてゐる。半世紀を少し過ぎたばかりに、かつて破竹の勢を以て、中山に侵入した尙巴志の子孫が、一魔術師の呪文を相圖に、脆くも顚覆されたのは、悲慘なことではないか。この時安里大親は、巧みに群衆心理を利用したに相違ない。彼は革命が成功した刹那、弟護佐丸の仇を報いたことを喜んだであらう。彼がこの革命の中心人物であつたことは、今日に至るまで、

默つてゐて策を弄する人を、「安里大親やか上ゆん」（安里大親以上だの意）といふのでも能くわかる。さて、これからささはどうなるかといふと、例の由來書は、

諸人は御轎龍紋御衣裳捧上、內間村江參、奉レ迎候付、內間公御驚被レ給候は、臣として君を奪候は不忠、下として上を叛候は不義にて候間、汝等首里江罷歸、貴族賢德之人を選、君に可レ仕旨被レ仰候得共、諸人不二聞入一故、內間公は海中之干瀨に御逃被レ遊候付、追參段々申上、無二是非一御衣裳御替、首里江御登被レ遊二御卽位一候。右に付干瀨は衣懸瀨と申候旨御世譜相見得候由承知仕候。右白髮之老人と有レ之候者則大安里にて候由傳有之候。

とあるが、この時の內間御鎖の心持も、亦讀者の推察にゝ仕せするほかない。兎に角西原には、ウガンヂャモー、ウチユーモー、ンシユカキジー等の土地が遺つてゐて、土地の古老等は能く當時の光景を語つてくれる。この記事を見ても、ユーウテーをした白髮の老人が、安里大親であつたことは、最早疑ふ餘地がないが、この時彼は八十歳を越えてゐたらう。高齡に達して、尙矍鑠たるところを見ると、彼も亦弟護佐丸のやうに、强い肉體の持主であつたことがわかる。中城村の伊金堂の安里元光氏の家の口碑によると、その祖先はイズルンといつて、護佐丸の兄であつた、といふことであるが、これで見ると護佐丸には、二人も兄がゐたことになる。

かうして一文官の內間御鎖は、一躍して「琉球國のよのぬし」になつた。普天間家の口碑によると、

この時彼の長兄の大米須は、「よあすたべ」の一人であつたが、弟が王位に卽くのに反對して、山原（沖繩島の北部の山地）に隱遁したといふことである。世鑑には、彼の卽位が成化六年（西曆一四七〇年）の五月になつてゐて、尙德の死から一年後のことになつてゐるが、この時、守護神の出現があつて、彼を「金丸あんじおそひ末續の王にせ」と命名したので、山林に隱れてゐた人達は、出でゝ之に仕へ、「ぢはなれ」（離島）は、心を一にして之を迎へ、「まひとべ」（民衆）は、「あやで」（手拍子）を拍つて之を稱へ、「おもろみひやし」（神歌）の調が、衢に滿ちたといふことである。

この時に出現した守護神は、多分君眞物であつたらう。前王朝でもさうだつたらうが、以後の琉球國王は、皆神御名（神號）なるものを有つてゐる。試みに、金石文を播いて、一二の例を見てみよう。「かたのはなのひのもん」に、「大りうきう國中山王尙淸はそんとんよりこのかた二十一代の王の御くらゐをつきめしわちへ天より王の御なをば天つぎの王にせとさづけめしよわちへ御いわい事かぎりなし王がなしはむまれながらむかしいまの事をさとりめしよわちへ云々」とあつて、彼の孫の尙淸は「天つぎの王にせ」卽ち天の意志を繼ぐ主權者といふ意味の神御名をつけられてゐる。それから、浦添城の前のひのもんには、「りうきうこくちうさんわうしやうねいはそんとんよりこのかた二十四代のわうの御くらゐをつきめしよわちへうらおそひよりしよりにてりあがりめしよわちや事てんよりわうの御なをばてだがすゑあんじおそひすゑまさるわうにせでゝつけめしよわちへ云々」とあつて、島津氏の琉球入の時捕虜とな

つて、日本にいつた尙寧王は、「てだがすゑあんじおそひすゑまさるわうにせがなし」即ち日神の子にして子々孫々繁昌する主權者といふ意味の神御名を授けられてゐる。これで見ると、「琉球國のよのぬし」は、開闢の時に天から一旦高祖高宗へ附與されたせぢ(神聖)を次から次へと、遺傳されたのではなく、その都度、天から直接に、其の人に與へられたといふことになる。先達而國學院大學の折口信夫氏に、このことを話したら、萬世一系といふことは、日本國民の理想若くは希望であつて、「高光る日の御子」といつたやうに、萬葉集などに歌はれてゐるのを見ると、日本も古くはやはり天皇は、其の都度、天から直接に、神聖を附與されると考へてゐたもので、古代生活の樣式が琉球に遺つてゐるのは面白いことだ、といはれた。かういふ場合には、まづ君眞物の出現があつて、壯嚴な儀式の下に、命名式が行はれたに相違ない。

世鑑を見ると、この年の秋、「金丸あんじおそひ末續の王にせ」は、長史蔡璟等を明國へ遣はして、尙德の世子として、襲封を請はせたら、その翌年卽ち成化八年、明の憲宗皇帝は、欽差正使給事中官榮と副使行人韓文とを遣はし、彼を封じて、琉球國王となした。そしてこの時正使が朗讀した詔勅の一節にはかういふことがあつた。

惟ふに、爾克く海邦を撫有し、皇明に臣事し、克く忠敬に篤し、乃父尙德王封を紹襲ひ、曾て未だ數年ならずして、遽焉として逝す。爾家嗣と爲り、以て克く賢に象る、宜しく爵命を受け、其國人を統ぶべし。

（原漢文）

かうして、彼は、尙圓と稱して、第二尙氏の王朝を建設した。沖繩では、自分が亡ぼしたものゝ世子と稱して、冊封を請うたのは、是が初めてゞはなく、明史や明實錄を見ると、前王朝もやはりさうであつたが、この時五十八歲にもなつてゐた尙圓は、三十臺の尙德の世子として、勅使の前に立つても、別に差支へがなかつただらうか。尙德の冊封はそれから僅十年前で、當時の冊封使及び隨行員等は、親しく二十臺の尙德を目擊していつて、話しただらうから、此の度の冊封使も、その世子は多分十歲前後の者と豫想して來たに相違ない。さういふところへ、六十歲近くの老人が、世子と稱して、飛出したら、どうだらう。支那といふ國が、異種族の領土を統一するについては、どの時代でも、極めて寬大な取扱をしてゐて、政治上經濟上の問題に關しては少しも容嘴しないに拘らず、儀式典禮のことにかけては、非常にやかましい國であることがわかつたら、この邊の消息が、少々窺はれるやうな氣がする。久米村例寄帳の首集に、尙淸王が嘉靖六年に卽位して、その翌年、請封の願ひの爲に使者を立てた處、禮部から庶子又は他家の者ではないかと突込まれたので、使者は一旦歸國して、充分に協議を遂げた後、諸官から世子に相違ないといふ證文を差出して、漸く切拔けたといふことがあり、又この時の冊封使陳侃（ちんがん）の使錄にも、同樣なことが見えてゐて、世子尙維衡の廢嫡問題が支那に知れて、事が面倒にならうとした位だから、この時、尙圓は病氣と稱して出なかつたか、それとも八歲になつてゐた尙眞が代りに出て、

冊封を受けたか、どちらかでなければならぬ。私には、尙眞が代りに出たやうに思はれてならない。

兎角、この難關は、どうにかして切拔けたと見える。世鑑に、その翌年の三月九日に、天神君手摩(きみてすり)が出現して、尙圓の慶賀をしたとあるが、同書の開闢の條に、この神は、一代に一度、國王卽位の後に、出現して、その萬歲を祝し給ふ神で、二七日間詫遊される、そしてオモロはその時の託宣(みせゝる)であると見えてゐる。これは昔からあつた儀式で、この時に始まつたのではないのである。「おもろさうし」の四の卷の五十八章に、「あおりやへがふし」といふオモロがあつて、その前の說明に、「首里天尙寧加那志御代萬曆三十五年ひつじの年十月十日つちのとのみのへ、きみてづりのもゝかほうごとの時に、大きみの御まへより給申」と書いてあるのを見ると、これは尙寧王卽位の翌年にあつた同儀式の時の託宣(みせゝる)で、この儀式のことを古來「君手摩(きみてすり)の百果報事(もゝかほうごと)」といつて、卽位の翌年に行はれたことがわかつて來る。御參考までに、このみせせる(オモロ)を紹介しよう。

一しより、　大きみぎや、
首里もり、　おれわちへ、
あぢおそいしよ、
せぢ、　まさて、　ちよわれ
又とよむ、　くにおそいぎや

まだまもり、おれわさへ
又あぢおそいが、おより、
わうにせが、おより
又きらのかず、おれわちへ、
ゑかのかず、おれわちへ、
又おれらかず、みまぶら、
あすばかず、みまぶら

こゝでは、しより大ぎみは、國王のことでは無くて、三十三君の一人なる女の神職のことである。『女官御双紙』を播くと、しよりおほぎみ（首里大君）が、三人もあつて、第一は、尙清王の次女の槿月、第二は、尙元王の一人娘の一枝で、尙維衡の孫の尙懿の妃となつて、尙寧を生んだ人、第三は、尙豐王の長女の徹心であるが、このオモロに出てゐるのは、とりもなほさず、第二のしより大ぎみで、とよむくにおそひが、その同義語（シンニム）であることはいふまでもない。このオモロの意味をかいつまんでいふと、首里大きみが、我が王の爲に、首里杜（しよりもり）に天降（あもり）給へば、我が王こそ稜威（みいつ）まさり給へ。首里大ぎみは、我が王の爲に、浦毎に島毎に、天降（あも）り給ひて、託遊毎に、我が王を守護し給はむ。といふことである。（このオモロは十二の卷の九章と二十の卷の四十八章とにも出てゐる。）

それから四の巻の五十三章と十二の巻の九十二章とにも「あおりやへがふし」といふのが出てゐる。これは「尙寧王の御代萬暦三十五年　未のとしきみてづりのもゝかほうごとの時に十月十四日みつのとのとりのへのうしの時に、さすかさのみ御まへ、しより大きみのみ御まへ、せんきみのみ御前より給申候」と説明がついてゐて、前のと日は違ふが、眞夜中に、首里大きみ外二人の神人たちが、告げた神託（みせへる）である。煩を厭はず、之も紹介することにしよう。

一きこへ、　さすかさが
さしぶ、　おれかわて、
ともゝとの、　よそう、　せぢ、
あんじおそいに、　みおやせ
又とよむ、　さすかさが、
むつき、　おれなおちへ
又けおの内は、　おしあけて、
しよりもり、　おれわちへ
又もちろ内は、　つきあげて、
まだまもり、　おれわちへ
又あぢおそいよ、　ほこて、

たゝみきよよ、ほこて

これは、貴い佐司笠按司、天降り給ひて、千代かけて國を知ろしめさむ稜威を我が王に奉らせ給へ。京の内を押開き、首首杜に天降り給ひて、我が王を祝福し給ふ。といふことである。前にも述べたとほり、「きみてづり」は二七日の託遊とあるから、その間に幾度か現れて託宣があつたものと思はれる。『おもろさうし』の中には、「きみてづりのもゝかほうごと」の時のみせゝるらしいのは、かなりあるやうだが、かういふやうに判然説明のついたのはない。けれども、尙圓の時のみせゝるも、大方こんなものであつたかと思ふ。「きみてづりのもゝかほうごと」があつて、尙圓は一入そのせぢ（稜威）を增し王位はいよ〳〵安定したのである。

つらつら當時の事情を考へて見ると、精鋭な軍隊を將ゐた尙巴志が、親子兄弟親戚諸共に、「うらおそひ」に入り、護佐丸の援助を得て、「もゝうら」に號令したに反して、既に老境に入つた尙圓は、何等軍隊の擁護も無く、たゞ革命黨員の案内するがまゝに、若い妻と幼兒と病身の弟とを携へて、「しよりもりぐすく」に入り、魔術師安里大親の智慧を借りて、三十六島に君臨したのである。誰か時勢の激變に驚かない者があらうか。

五

『おもろさうし』の一の巻の五章の「あおりやへがふし」は、尙巴志の出陣を謳つたオモロであると思ふが、說明の便宜上、一寸紹介することにしませう。

一きこゑ大きみぎや、
あけの、よろい、めしよわちへ
かたな、うちす、
ぢやくに、とよみよわれ
又とよむせだかこが
又月しろは、さだけて
又物しりは、さだけて

これは、貴き王が、緋威の鎧を召し給ひて、大刀を佩き給ひてこそ、名聲國中に轟き給へ。稜威高き王が、守護神を先導として、巫覡を嚮導として。といふことである。尙巴志(せだかまもん)は、武力を以て鳴つた名將であるが、當時は魔術が武力に劣らないものと信じられてゐたから、流石の彼も當時の習慣に從つて、やはり巫覡を魁として、惡靈を拂はせながら進軍してゐる。

兎に角、いかなる征服國家といへども、魔術を無視することが出來ないといふことは、支那の北方民族の歷史に於ても、見ることが出來るやうな氣がする。回紇の牟羽可汗が唐に侵入した時、郭子儀の威

風に壓せられて、「始め虜二巫有り、言ふ、此の行、必ず戰はずして、當に大人を見て、而して還る可しと。是に及んで、相顧みて、笑つて曰く、巫吾を紿(あざむ)かざるなり。」といつたところを見ても、侵略に先立つて、巫覡がその謀に參與した光景を思ひ浮べることが出來るだらうと思ふ。古代に於て、勇猛な武將が、魔術師の一言の呪詛で、全く力を失つて了つたことや、魔術師に詛はれた原始人が、恐怖の爲に往々にして死に至ることなどを知つたら、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。第一尙氏の時代には、多分軍事上に於ても、政治上に於ても、武力と魔術とは並行はれたであらう。

けれども第一尙氏の征服國家が、瓦解して、第二尙氏が勃興すると、武力は殆どその影をひそめて、魔術が盛んに行はれるやうになつた。當時巫覡が非常に幅をきかして、政治にまで嘴を容れてゐたことは、拙著『古琉球の政治』に、くはしく書いて置いたから、茲ではくりかへす必要はあるまい。

例の陳侃使錄に、

俗畏神。神皆以婦人爲尸。凡經二夫者則不之尸矣。王府有事則哨聚而來。王率世子及陪臣。皆頓首百拜。所以然者。以國人凡欲謀爲不善、神卽夜以告。就擒之。聞昔倭寇有欲中山王者。神卽禁錮其舟。易而水爲鹽易而米爲砂。尋就戮矣。爲其守護斯土。是以國王敬之。而國人畏之也。尸婦名女君。首從動經三五百人。各戴草捲。携樹枝。有乘騎者有從行者。入宮中以遊戲。一唱百和。聲音哀慘。去來不時。

といふことがあるが、かういふ風に、魔術を行つて、群衆を心理的宗教的に率ゐた有様は、當時既に高級の知的生活に入つてゐた支那人の目には、甚だ奇怪に映つたであらう。慶長年間、沖縄にやつて來た僧袋中の『琉球神道記』にも、略同様な記事が見えてゐて、それに、百年以來、民風大いに變じ、神怪の事、今は則ち絶ゆ云々、と書添へてあるところから見ても、島津氏の琉球入から百年前、則ち第二尚氏の王朝建設當時に、魔術が非常に盛んであつたことは、十分推測することが出來るだらうと思ふ。

三山が鼎立してから、尚巴志が之を統一するまで、殆ど一世紀、尚巴志の征服國家が勃興してから、それが沒落するまで、殆ど半世紀、この一世紀半の間に、その人民は、塗炭の苦しみを受けた。おまけに、最後の數年間は、恐怖時代とも云ふべきものであつたから、彼等の心理狀態は、ヒステリックになつてゐたに相違ない。上古以來その社會を支配してゐた魔術が、武力の減退に乘じて、大活動を始めたのは、當然なことゝいはなければならぬ。私はこの時代を解釋するに當つて、今少し魔術のことを明かにして置かうと思ふ。『君主の魔術的起原』(マヂカルオリジンオブキングズ)の著者フレーザー教授は、蠻人の研究から出發して、君主なるものが、原始社會の魔術師に起原するといふことを力說する人であるが、彼は「最初の君主が部落中の腕力に勝れ勇氣に勝れた者であるといふ通說は、事實の穿鑿の勞を嫌ひ、アームチエヤーにもたれながら、種々の論理を弄ぶ學者の空想に過ぎない。」といつてゐる。征服國家の成立は、武力的爭鬪の結果

であつて、必ずしも魔術のみで、成立するものではないが、前にも述べた通り、いかなる征服國家も、魔術を無視しなかつたところを見ると、フレーザーの說も、亦半面の眞理を語つてゐるものといはなければなるまい。そして私が今取扱つてゐる琉球史上の問題は、彼の學說を裏書きするものではないかと思つてゐる。

魔術（マジック）といふ言葉は、近代人の語感には、少しく奇異に響くものであるが、能く考へて見ると、この言葉も亦、面白い言葉の一だといふことがわかつて來る。一體人類の認識は、發達し分化して、あらゆる知識となり、そこに政治、哲學、理學、醫學といつたやうな分野が出來たものゝ、原始時代に於ては、さういつたやうな分化がなく、あらゆる知識が、魔術といふ言葉でいひあらはされてゐた。そして原始社會の單調を破つて出現した魔術師は、雨を右左したり、日光を右左したりする能力があると信ぜられたばかりでなく、陳侃（ちんかん）使錄にもあるやうに、罪人を發見する能力があると信ぜられてゐた。かうして、彼は次第に全部族の運命を掌中に握るに至るのであつた。

前にも述べた通り、勇猛な武將が彼の呪詛で全く力を失つたり、また彼に詛はれた原始人が、恐怖の爲に、往々にして死んだりとするのは、さういふ力が、彼に實在したのではなく、暗示にかゝる心理が彼等に存在してゐたからである。俗にいふ「あがり方（かた）」卽ち島尻郡の知念玉城邊には、古來死體に手を觸れると、立どころに死ぬといふ迷信があつて、それには手に布を卷いて觸れるやうにしてゐるさうで

あるが、或時新教育を受けた土地の人が、そんなことがあるかといつて、土地の習慣を無視して、手を觸れたら、體中が眞黑くなつて間もなく死んで了つたとのことである。彼は半信半疑で、さういふことをやつた爲に、自己暗示にかゝつて、たうとう死んで了つたのであらう。この事があつて以來、そんな危險を犯す者は、ゐなくなつたが、其の後醫者の大城幸之一氏が職掌柄、直接之に手を觸れても、何でもなかつたといふので、村人から非常に畏敬されるやうになつたと聞いた。これに似たやうな迷信は、他の地方にもあるかも知れぬ。兎に角、沖繩の田舍では、家に病人がある時には、醫者を呼ぶよりも、巫女(ゆた)を呼ぶ所が多いだらうと思ふ。

先達而東洋文庫で、皇明世法錄の琉球の條を見てゐたら、その政敎一致のことを述べた一節に、「酷信鬼。不知醫藥。」とあるのを見て、面白いと思つた。沖繩に、「醫者巫女(いしやゆた)」といふ言葉があるが、これは醫者と巫女(ゆた)といふ二つの言葉ではなく、この兩方を兼ねた者を言ひあらはす一つの言葉で、ポリネシヤのメデシンマンや支那の北方民族のシャマンと同じ意味の言葉であるのも、注意すべき點だと思ふ。

覺えず横道に這入つたが、私はこれから、公的魔術師に就いて、少しく述べて見ようと思ふ。御承知の通り、沖繩語でも、國語と同じく、巫覡のことを物知りともいつてゐるが、これは巫覡(ときゆた)が、部落中で最高の知識の所有者であることを語るもので、彼等は單にトひをするばかりでなく、王代記もそらんじて居れば、病氣もなほしてやる、其の他何でも知つてゐるといふ重寶な連中なのである。

政教一致時代に於て、「ときゆた」（巫覡）が、公認されてゐて、時之大屋子（巫覡長）が、これらを統率してゐたことは、「中山王府官制」の語るところであるが、この時之大屋子以下の「ときゆた」は、フレーザーの所謂公的魔術師に當るものだらうと思ふ。フレーザーによると、公的魔術師の行ふ最も重要な職分は、食料の十分な供給に關するもので、食料の獲得については最初個々の方法が採用されたが、後には公的のものとなつて、其の社會團體を支配する魔術師が、之を司るやうになつたといふことである。そして公的魔術師は、部族中で最も有能であり、最も冷たい頭腦の所有者であつたと共に、最も野心に富み、最も横着であることを必要とし、從つて搾取の現象は必ずこの一團に伴ふといふことである。

試みに、『おもろさうし』を播いて、租稅に關するオモロを調べて見ると、十首近くもあるが、その中の過半が祝女や巫覡の之に關係したことを歌つてゐるのは、注意すべきことだと思ふ。今その二三を紹介することにしよう。八の卷の五十四章、きみがなしがふしに、

一あかゝ、　おゑつきぎや、
人の、　うちに、　あつる、
かまゑ、　よせ、
かきつるぎ
又れはの、　おゑつきぎや

といふオモロがあるが、これはオモロ詩人のアカインコが、津々浦々から、租税を取立てることを歌つたものである。同じ巻の六十二章に、「あかのおゑつぎや、しまの、よた、やれば」といふ文句があるから、彼が巫覡であつたことは明である。かまゑは貢租のことで、それには「上納之事、昔はつかかないと申して、人の頭の程稲一たわりづゝ上納有之たる由也」といふ註がついてゐる。

十三の巻の丸十四章のうちいでかつかねがふしに、

一あけしの、　かみにしやが、
なむぢや、　こがれ、　よらちへ、
はりよる、　きよらや
又なよかさの、　のろにしや
又あさどれが、　しよれば

といふのがある。これは、アケシの祝女が、金銀の貢物を積んで、朝なぎに、船出する美觀を歌つたものである。同じ巻の丸十章のおみしやくぬきあげがふしには、

一きこゑ、　あけしのが
ぢやくに、　かなしけや、
かみ下の、　かまへ、

つて、　みおやせ
又とよむ、　あけしのが

といふのがあるが、之は、貴きアケシの祝女は、御國を愛すればこそ、上下の貢物を滿載して、奉れ、といふことである。今一つ同じ卷の百六十八章の首里ゑとのふしに、

一しませんこ、　おやのろ、
おやのろは、　たかてて、
あぢおそいに、
かまへつて、　みおやせ
又あけしのゝ、　おやのろ、

といふのもある。之は、シマセンコの親祝女（おやのろ）よ、アケシノの大祝女（おほのろ）よ、祈りを捧げて、我が王の爲に、租稅を取り立てゝ、奉れよ、といふことである。

沖繩縣廳の調査によると、三十年前、中頭地方には、六十四人の祝女があり、國頭地方には四十四人の祝女があり、島尻地方には百四人の祝女があつたが、これに宮古八重山の兩群島及び奄美大嶋群島の祝女を加へると、古くは三百人からの祝女がゐたことになる。のろには、もと「祈る人」と「咀ふ人」との意味があつたやうである。その神社をのろ殿内（どうち）といつて、一間切に、數ヶ所もあつたが、何れもそ

の地の信仰の中心になつてゐた。そしてその管轄内の人民たちは、近代まで、お米が取れると、家の暮しに應じて、或は五合、或は一升、とそのお初をのろ殿内にもつてゆくと、祝女はかうして集つたものの中、幾分を琉球最高の神社聞得大君御殿に献上したとのことであるが、さういふところにも、祝女(のろ)がかつてかまへ卽ち租税の取立てに關係した遺風が見られるやうな氣がする。

以上は政敎一致時代に、公的魔術師が、貢取りであつたといふことを證明する好個の材料であるが、私はこれから、尙圓が、この公的魔術師を利用して、どんな搾取の機關を作つたかを述べて見よう。『毛氏安里大親由來書』の終りの所に、かういふ記事がある。

其後、被レ遊二御卽位一、尙圓と奉レ稱候。清信其朝に被二召仕一、前言を御感被レ遊、擢二清信一援二安里地頭職一、世々及二子孫候段、家譜に相見得候。右宅地之儀、靈地にて候故、崇元寺被二召付一、廟之前天井被二相構一、左右樹木有レ之、石を以相圍候場、則大安里馬鞭を殘置謂にて候。右付社と申傳、今以每年五月六月兩度之御祭之時は、必右場所致二拜禮一來候。右地御崇廟所相成候付、大安里者若狹町村江居宅引移候處、其嫡子安里親方代に至、尙眞樣蒙二御意一、首里立岸村江家屋敷拜領仕罷登住居仕候。

大安里崇元寺之地に住居仕居候時、浮繩之御嶽之邊に魚を釣、相樂候處、右屋敷は、御堂廟所差上、若狹町村江引移候後、人々其場所を追慕、石を以相圍、諸木植付、浮繩嶽と名付、參詣所に仕候段、舊記に相見得候由承知仕候。

この記事を見ると、尙圓と安里大親との間に、密接な關係の結ばれたことが能くわかるが、安里大親

が、尙圓の卽位と同時に、「あさとおきて」卽ち安里の地頭職に任命されたことも、明になつて來る。

私はかつて、尙德王の晩年に、安里大親が內間御鎖の推薦によつて、安里掟の位地を贏得たといつたことがあつたが、私は今その說を取消さなければならないやうになつて來た。前にも述べた通り、彼は護佐丸の兄であつて、かつて大城掟であつたのを、弟の沒落と同時に、その位地を失つて、泊邊に放浪してゐたのだから、護佐丸の寃罪が最後まで取消されなかつた王朝で、反逆者の兄なる彼が、安里掟といふ重要な位地を授けられる筈がないからである。『おもろさうし』の十五の卷「うらおそいきたたんよんたむざおもろ御さうし」の一章、あかいんこがふねたてはがふしに、

一あさと、　おきて、
おやみかま、
かまふつむ、
しよりおやぐに
又あめくぐち、
おやどまり、
又なはどまり、
おやとまり

とあるのは、革命の第一の功勞者なる魔術師安里大親が、尙圓が位に卽くや否や、この重要なる位地を

與へられて、活動する狀を歌つたやうな氣がするが、どんなものだらうか。(よしさうでないとしても、一向差支へはないけれども)これは安里掟(地頭)が、屬島から持寄せて來た租稅を受取つて、首里王府に奉るの意である。當時泊が、安里村の一部で、浦添間切に屬する港であつたことは、このネモロが「うらおそいのおもろさうし」中に收めてあるのでもわかるが、那覇も亦浦添間切の西南端に位すの出る島であつたやうだ。つまり、當時、浦添間切の南部には、この二港があつて、ぢはなれ(屬島)の船舶入が頻繁になつたので、「きこゑうらおそいに、西東の貢物持寄せて」又は、「きこゑうらおそいや、島の親やれば、百按司の貢物積で奉せ」などと、謳はれたのである。

十三の卷の八章に、

一しより、　おわる、　こだこが、
うきしまは、　げらへて、
たう、　なばん、　よりやう、
なは、　どまり
又ぐすく、　おわる、　ごたこが

とあるのは、首里に在す王が、浮嶋を修理して、唐南蠻の船舶の寄合ふ那覇港を築港した、といふことで、尙金福王の時に、安里橋(今の崇元寺橋)から瀉原のいべがままでの間に、長虹堤を築いた頃のオモ

ロだと思ふが、この頃那覇は、多分、外交上、便宜な政治都市になつてゐたらう。そしてそれまでは、泊港が唯一の國港で、租稅徵收の便宜のために設けられた政治都市であつたことは、いふまでもない。尙德王の時、卽ち成化二年に、始めて設けられた泊地頭（あさとおきて）は、實にこの政治都市の市長みたいなものであつたが、安里大親は、今この樞要な位地に置かれたのである。久しく御物城御鎖之側であつて、王府財政の樞機を總覽し、その上外國及び層島關係の事務にたづさはつてゐた政治的天才とこの老練な魔術師とが、同心一體となつて、事に當る時、そこに新王朝の經濟政策が確立するのは、火を睹るよりもあきらかである。

序でにいふが、安里大親は、安里掟になつてから、さういふ名稱で呼ばれるやうになつたので、革命當時、どういふ名稱で呼ばれてゐたかは、判然しない。それから、同時代に、南山の王子をかばつた安里大親があるが、それは具志頭間切安里村の住人で、この安里大親とは、同名異人であることを知らなければならぬ。

さて、王統を一新した尙圓は、明國の冊封を受けた後、おもむろに、三十六島の統治法に就いて、頭を惱ましたに相違ない。特に一家のことに就いては、少からず氣をもんでゐたに相違ない。老境に這入つてから出來た獨息子（ひとりむすこ）のまあかとだる（尙眞）は、今漸く八歲になつたばかりである。萬一彼がこの兩三年のうちに、この世を去ることがあるとしたら、或は冊封の時の典禮の都合上、弟の尙宣威を自分の叔

父とか何とかいふ名義で、一旦王位に卽かせて置いて、後でその世子といふ名義で、尙眞に讓つて貰はふと思つてゐたかも知れぬ。けれども弟が若しこの約束を守らなかつたら、どうしようと考へたとき、何事も知らぬげに、快濶に遊んでゐる愛兒の後に、恐ろしい運命が、底氣味惡く覗いてゐるやうな氣がして、言ふに言はれぬ悲哀を感じたに相違ない。

かういふやうに、想像を逞しうして、『おもうさうし』の十四の卷の四十五章の「きこゑかねまるがふし」を誦する時、私には、この邊の消息がいくらかわかつて來るやうな氣がする。

一きこゑ、　かねまるが、
おもひぐわの、　きみの、
あすべば、
みぼしや、　しよわちへ
又とよむかねまるが、
おなりがみの、
あすべば

これは、貴い金丸は、御子のまあかとだるが無邪氣に遊んで居られるのを頻りに見て居られるが、餘りの可愛ゆさに、いくら御覽になつても、なほ飽きたらないといふ御有樣である、それからまた、側で

は、その守護神なる幼兒のおもとのもいがねが、いぢらしく遊んで居られるが、これにも同じく見とれて居られる、の意で、オモロの詩人が、尙圓王の寂しい氣持を歌つたのだらうと思ふ。この時、王は涙ぐんで居たに相違ない。伊平屋島を追出されて以來苦勞ばかりして來た彼は、此頃心身共に弱りきつて、多分死期の近づいたのを自覺してゐたらう。それから五年たつて、成化十二年（西曆一四七六年）の七月二十八日に、彼は、三十六島と最愛の妻子とを多病な越來王子尙宣威に托して、他界な人とのつて了つた。この時彼は六十九歲であつた。

六

世鑑によると、この時、世子久米中城王子の尙眞が立つ筈であつたが、群臣が會議を開いて、世子は幼少だから、成長するまで、暫らく叔父の越來王子を君主に戴く方が都合がいゝといふので、尙宣威をよのぬしと仰ぐことにした。九歲の時兄と共に、伊平屋を逃れて、いろ〳〵の苦勞を嘗めさせられた彼は、その翌年四十八歲で、漸く酬いられて、琉球國のよのぬしとなつた。にしのよのぬしといふのが卽ちこれである。前にも推測を逞しうした通り、當時十五六歲の積りであつた尙圓の世子として、十二歲の尙眞をもつて來るのは、一寸具合が惡かつたので、越來王子を親戚の者といふ名義で、一旦立て、置いて、時期を見て、尙眞をその世子といふことにして、立てる積りであつたらう。

眞境名安興氏の話によると、尙眞は實は尙圓の子ではなくて、尙宣威の子である、と誰かがいつてゐたとのことであるが、この口碑はこの邊の消息をいくらか漏らしてゐるのではないかと思はれる。尙眞が尙圓の實子であることは、あの「あがをなりがみがふし」を見ても能くわかるが、尙眞が尙宣威の娘の居仁を娶つたことや尙眞の長女の佐司笠按司まなべだるが尙宣威の子の美里王子朝易に嫁したのが、一番能く證明してくれると思ふ。して見ると、尙眞の冊封の式典をうまく切拔ける爲に、畫策されたことが、四百年も傳承されていく間に、かういふ口碑が出來たものだといふことも、判然して來る。兎に角、尙宣威は、尙眞が成長するまでといふ條件で、王位にすへられたのであらう。

ところが、當時は、祭政一致の時代で、政治上に於ける女子の勢力が强かつたことや、尙圓の未亡人のおぎやかが、三十を一つか二つ越したばかりであつたことを考へて見ると、尙宣威の運命がどうなるかといふことは、誰にでも想像のつくことだらうと思ふ。世鑑に、かういふ記事が見えてゐる。

御卽位の年の二月、陽神キミテギレ（オモロにはきみてづり）現れ給ければ、尙宣威是は必定我が慶賀（オモロにはもゝかほうごと）の爲におりさせ給ふ神にてぞあるらん、と悅び思召て、をぬしは帝座に付せ給て、久米中城王子をば帝座の腋にぞ立せ給ふ。舊例には、君々神々內原（內殿）より出給て、きみほこり（奉神門）の前に、東面に立給けるが、今度は例に替り、西面にぞ立給ける。去程に、上君を初として、下老若男女に至るまで、是はそも何事やらんと魂を冷し、手を握り、かたづを

飲んで居たる處に、宜託有けるは、（このオモロは「おもろさうし」十二の巻の十二章と廿二の巻の四七章とに出てゐる。）

首里おわる王、我が思子の、遊び見物、遊び躍れば、見物。

（オモロ草紙には、玉の下にががあつて、我がが無く、最後に、「城おわる玉が、鷲の羽差し給わちへ」といふ一句がついてゐる。これは、我が世子の欣喜雀躍し給ふみ姿の美しさよ、鷲の羽を翳し給へる御子こそ、我が王なれ、といふほどの意味をもつてゐる。）と神歌をぞ召されける。

尚宜威聞召給て、我其德に非ずして、帝座を汚したること、是天のとがめ有けるぞやとて、在位六箇月にして、御位をのがれて、世子久米中城王子をぞ即位成奉候給ふ。

この事件がトキヽユタ（巫覡）の差金によつて起つたことは大方推測することが出來るのであるが、多分神人の一人が神懸りして、ねうしがとき即ち眞夜中に、きみてづりの出現されることを知らしたであらう。尚宣威は、「きみてづりのもゝかほうごと」としては、少し早過ぎると思ひながら、君てづりの慶賀を受ける爲に、君々及び神々の案内するがまゝに、きみほこりに出かけて見ると、あの通り、退位の神託を聞かされて、面喰つたのである。

この神詫を見ると、尚眞は鷲の羽を翳ざしてゐるが、これに就いて、少しく考へて見ようと思ふ。「宮古嶋舊記」や「遺老說傳」を播くと、根間のいかりが、龍宮に漂流して、こねり（祭式舞踊）を習つて來ることがあるが、彼が歸つて來て、根所（氏神）で之を傳授するところに、いかりが眞中に臺の上に登つ

て西方に向つて立ち、白鷺の羽の長さ一尺ばかりののを翳じて、神歌を唱へると、二十四人の神人は、鷄の羽を翳して、いかりを取圍き、いかりの詞を清めながら、節毎に拍子を揃へて皷を打鳴してゐる。そして附りのところに、白鷺の羽は祭の時期には、いつも島の北方白川濱に寄つて來と書いてある。又天保年間に薩摩の藩士の手になつた「南嶋雜話」中にも、神人が白い鳥の羽を翳した畫があつて、これが鴛鴦のおもひ羽若しくは鷺の羽だと書いてあるが、今から百年前まで、この土俗が南嶋に遺つてゐたのは面白いことである。古くは祭式舞踊の場合には、皆鳥の羽を翳してゐて、音頭取は特に鷺の羽を翳してゐたことがわかる。

あの晩、神人は、豫め神聖なる者のシンボルとして、尙眞に鷺の羽を翳させて置き、あのオモロを歌つて、彼を祝福したのであらう。それから、世鑑の記事の中に、君々神々が內原(內殿)から出て來ることがあるが、この神々は神人等のことで、南嶋では古來最高の神官以下下々の神職に至るまでを、神と呼んだことがこれで能くわかつて來る。そして當夜はこれらの神人の一人が、特に神懸りして、きみてづりに扮して、出現したことを知らなければならぬ。少しくどくなるが、これを證明する爲に、私は二三十年まで、沖繩の田舍及び離嶋に遺つてゐた士俗を說明するの必要を感じて居る。

二三年前、神祕な嶋といはれてゐる久高嶋に渡つた時、私は嶋の人達から、十二年に一回行はれるイザイホー(女子の成年式のことであるが、今では單に貞操試驗の義に解されてゐる)の時に、數丈も高い

木の上で神鉦が鳴るが、それを聞いた人々がいまだに生きてゐる、といふことを聞かされて、おもしろいと思つた。この話は、山原に旅行した時にも聞かされたが、山原には、神鉦を聞いたばかりでなく、神を見た人や神を捕へた人があると聞かされて、一層面白いと思つた。このことについては、私が聞いた話を書きつらねるよりも、羽地の稻嶺校の島袋源七君の著書『山原の土俗』(近い中に爐邊叢書の一冊として出版されることになつてゐる)の記事を拜借するのが、便宜で且つ確實であるやうな氣がする。今その中から面白さうなもの二つ三つを引用することにしよう。最初に安田(あだ)の海神祭(うんぢやみ)の時の神鉦を紹介しよう。

毎年七月癸亥の日を撰んで行ふウンヂヤミ祭の晩、諸行事が濟んだ夜半、ウガン山といふ所(字の北部の山)にて、微かに神樣の撞く鉦の音が聞えて來る。談笑する氏子はおろか、總ての人々は頭を垂れて額突かねばならない、かくして次第々々にこの音が麓の方に在る杜の方へ降りて來る。時々壯嚴な鉦の響が聞えて來る、氏子は彼等が赤心をこめて行つた祭に對し神樣が會心の笑みを與へたものとて、始めて安堵する。

次は、濱の神鉦を紹介しよう。

これには、著者の探險談がある。著者は大正十年九月同字南方のピヂュル御嶽を研究しに出掛けた。其處には一箇の御ビンズル樣が小さい祠の中に安置せられてゐる。實はこのビンズルを調

べに參つたのだが、意外の掘出物をしたのである。祠の正面奥まつた處には、香立ての曲角な石器があり、其の右手にビンズルが祭られてある。著者は之を調べて居ると、線香立ての後方に平たい石の在るのに氣がついた。不思議に思ひ、此の石を起すと、中に綺麗に穴が開けられ、その中に此の神鉦があるではないか、著者は未知の世界に引き込まれた樣な驚きと喜びとに舞ひ上つた。雀躍する胸を靜めて、金質や直經なりと調べて行つたら中々面白い。よし一つ失敬して宿に歸り寫眞をと思つたが、日はとつぷり暮れかゝつてゐる。蔭濕な小祠に居るのが何だか物凄くなつて來たので、ビンズルとこの神鉦とを寫眞にすべく宿に持ち歸らうと、手早くそれを包んで其處を出て來た。暮の山路を辿つて來ると、背後から髪を振り亂して呼び留める女が居るではないか。

「お呼びは私ですか」

女「然うです、何故それを盜むんだ」

著者は吃驚した。色々と其の故を話して詫びた。女はビヂユルビチと申し之を掌つてゐる神人である。私の話を理解したと見え、其の鉦の功德を說明して呉れた。

「此の鉦は字に不幸のあらうとする時に自然に鳴るものである。又船造りの時や、神樣の祟りのある時には必ず鳴るものである。人民でさへ見たことのないのを、あなたが見出したといふことは不思議である。」と話してゐた。彼女は猶ほ語を續けて、「先年この鉦が鳴り出したので、人民も驚き、彼れも驚き、神に御詫びすべく祠に行つたら、この祠の中、卽ち鉦の上の石に斑蛇がどくろを卷いてゐた」、等と言ひ、又不吉や不潔祟ある時には、必ず鳴るものだといつて、口を結んだ。（下略）

そして、島袋君は、この神鉦の寫生をしてゐるが、この神鉦は三つあつて、小は高さ四分直徑五寸で中は高さ五分直徑七寸、この二つは何れも金鼓やむらがねのやうな形をしてゐる。それから大は高さ六分五厘直徑八寸五分で、擂鉢のやうな恰好をしてゐる。これで疑問の神鉦の正體は、能くわかつて來たが、次には、神樣をとらへた話を紹介しようと思ふ。

卅年程前迄は、大宜味村字鹽屋では、新造の帆船ある時、明日が進水式だといふ夜半には、必ず氏神の森から神鉦を鳴らしつゝ、數多の神々が現はれ來たり、船を巡りつゝ釘の打ち方の拙い方には神杖をもつて標をつけ置くものだと信じてゐたらしい。それで某氏が其の神樣の正體を見屆けたいものだと思ひ、船底に隱れ居て、神樣の出現を待ち佗びてゐた。

それとも知らぬ神樣等は神鉦を鳴らしつゝやがて現はれて來た。頭には白八卷を締めて後方に垂らし、白い衣裳を着した神樣は所謂神々しさを示しながら數柱現はれた。新造の船に上り、その上を巡り、初め杖をもつてあちこち突つつき廻つた。某氏は意を決し船に架した棧を除くや否や直ぐ其の上へ乘り上り、神々の一柱一柱に繩をかけた。よく〳〵見れば、それはこの字の祝女や神人の仕業であつたらしい。縛り上げられた神々も御氣の毒だが、某氏も彼女等を御氣の毒と思つたかどうか。

もつと面白い話もあるが、これ位にして置かう。かういふことは、上古以來祝女又は神人が交代毎に、引き續ぎ來つた祕密で、彼女等以外には、何人も、その眞相を知る者がなく、三十年前まで行はれて、

それで村もうまく治まつてゐたのであるが、これから類似して、私達は四百年前の祭政一致時代の狀態を考へることが出來るやうな氣がする。

かうしたことが、四百年前に、首里城内でも、行はれたのである。尙圓の「もゝかほうごと」の時に出現し又尙宣威を退位させる時に出現した「きみてづり」も、その正體は正しく人間であつた。世鑑の初に書いてある神々も、皆悉く人間と見て、差支あるまい。當時の宮中でも、田舍の場合と同樣に、かうしたことが、上古以來君々神々の間に、交代毎に、內證に引續がれて來たに相違ない。けれども、これは決して人をだまさうと考へてやるのではなく、神樣になつて出現する神人は、ちやんと神懸りして、現人神(あらひとがみ)の積りでゐたに相違ない。「おもろさうし」十一の卷の四十一章と廿一の卷の七十章とに出てゐるオモロに、「ねうしが、時、神が、時」といふことがあつて、尙寧王卽位の翌年の「きみてづりのもゝかほうこと」が丑の時(卽ち午前二時頃)に行はれたのを見ると、神の出現は大方眞夜中であつたと見て差支へないと思ふ。かういふ眞夜中に、古琉球の習慣に從つて、ベールを掛け、白衣を着けた「きみてづり」が、君々神々にかしづかれて、きみほこりに出現した時、その神々しさに打たれて、老若男女は地に平伏(ひれふ)したであらう。そして古來これが人間ではないかと疑つたのは、一人も居なかつたに相違ない。氣の弱い尙宣威がこの光景を目擊し、この神託(みせゝる)を聞いて、文句なしに、退位したのは、當然なことゝ言はなければならぬ。かうして、彼等は、神意に假りて幼者を神聖にした。「仕置」の中に、時の大屋子を

排斥して、極力迷信打破を絶叫した流石の向象賢が、この事件について世鑑に「竊に念ふに、神の尙宣威を廢し給ふ事は、全く世子を廢して、卽位し給ひたるを惡み給ふには非ざるべし。只尙眞公聖なれば也」と辯解してゐるのは、一寸注意すべきことではないか。

尙宣威は、早速その領地の越來へ逃れて、その年の八月四日に病死したといふことになつてゐるが、その後裔なる湧川家には、暗殺されたといふ口碑が遺つてゐるさうである。これは先達而同家の家譜を見にいつた眞境名氏の書簡中にあつた話で、私には、全く初耳なのである。その間に、何か隱れた事情があつたのではあるまいか。

これからいよ〳〵尙眞王卽位のいきさつになるが、五十年間も王位にあつて近代琉球の基礎を築き、彼を謳歌した七種の金名交まで遺つてゐるに拘はらず、琉球きつての名君尙眞大王のことが、正史ともあらう中山世鑑に、僅かに數行しか書いてないのを、私は物足りなく感じてゐる。向象賢は、何故、この肝腎なところをぬかしたのであらう。

七

私は、尙眞が明（みん）に冊封を請うた時、尙圓の世子と稱したかどうかを永い間疑問にしてゐた。けれども東洋文庫及び大學の歷史研究室で、二三の史籍を播くに及んで、この疑問は略解けたやうな氣がす

る。明史には「明年四月王卒。世子尚眞來告喪。乞嗣爵。」とあり、皇明世法錄には、「十五年尚眞嗣父圓立。」とあり、明實錄には、「成化十四年夏四月。琉球國中山王世子尚眞遣長史梁應等進表箋貢馬及方物請襲封王爵。賜宴幷金織衣綵段物有差。……丙午命兵科給事中董旻爲正使。行人司右司副張祥爲副使。齎詔往琉球國。封世子尚眞爲中山王。賜以皮弁冠服金箱犀帶弁。以紵絲羅等物賜王及其妃」とあり、又其の時の勅にも、乃父尚圓云々とあるから、尚眞が尚圓の世子として承認されたことは明である。かゝに亦新しい疑問が起つて來る。前に述べたやうな年齡の關係では、儀式典禮を重んずる支那人を胡魔化すことは、到底出來ないやうな氣がするが、どうしてこの難關を切拔けることが出來たのであらう。琉球最後の國王尚泰はかつて沖繩では、音締めの合はないことを唐音締といふ風で、何でも大まかなのには唐といふ形容詞をつけるほど、支那人は與し易いといはれた、とのことだから、支那人は儀式典禮に關しても、やかましいやうで、間の拔けたところがあつたかも知れぬ。尚眞の講封の時にも、此方からは、年齡や何かの都合上、尚宣威の子として出したかも知れぬが、さうすると、正史に書いて、後世に殘す時に、都合が惡いから、兎に角尚圓の世子として冊封してやらうといふ位のところで、妥協がついたと見るほか、仕方がない。尚思紹が武寧と世子として、尚圓が尚德の世子として、冊封されたのも、大方こんな調子ではなかつたかと思ふ。最初、やかましく言つて來ても、こちらから折れて出ると、自分には、大した損得も

ないことだから、内容の如何を問はず、形式だけ備つて居れば、最後には通してやつたものと見える。

それは兎に角、明實錄に「綜綵羅等の物を以て王及び妃に賜ふ」と記してあるところを見ると、尙眞には、十四歲の時、既に妃があつたといふことがある。吳姓家譜を見ると、廢嫡された尙吳の世子の尙維衝も、やはり十四歲の時に、那覇の花城親方宗義の長女で二十五歲になる思乙金と結婚したらしいから、四百年前には、かういふ早婚は、別に珍らしくもなかつたことゝ思ふ。この邊は今日の朝鮮の事情によく似てゐるやうな氣がする。

王代記を見ると、尙眞は叔父尙宣威の娘の居仁をいれて妃としたといふことがわかるが、當時はこれ以外に王族がゐなかつたから、已むを得ず、近親結婚をしなければならなかつた爲だらう。尙眞は弘治七年、三十歲の時に、彼女によつて、尙維衝を擧げてゐる。この人は俗に月浦樣といはれて、小祿按司家の元祖になつてゐる人で、向象賢や宜灣朝保やその他琉球史上で有名な人物は、大方この人の血を受けてゐる。王には、外に二夫人がある。一人は、前に述べた南山王の子孫の思戸金按司加那志で、華后と呼ばれた人であるが、彼女は弘治十年に、尙淸を生んでゐる。尙家初代の御家騷動の張本人で、陳侃使錄に、戒母誑越と記された女である。今一人は羽衣傳說で人口に膾炙する茗荊子の女で、尙宣威の子の美里王子（球陽には美里里主）尙魏鼎は嫁した佐司笠按司加那志眞鍋樽を生んだ女である。王には、その外に妻妾があつたかも知れぬが、正史には記してない。兎に角、王には、七男一女があるが、右の三

人の外は生母と生年月日とがわかつて居らぬ。王代記には、尙維衝が長男になつて、その次に佐司笠按司があり、その次に大里王子尙朝榮が出て居り、以下三男眞武體金今歸仁王子尙韶威、四男眞三良金越來王子尙龍德、五男眞仁堯樽金中城王子尙淸、六男金武王子尙亨仁、七男豐見城王子尙源道となつて居るが、この順序はあてにならないやうな氣がする。

試みに、弘治十四年の九月に、玉陵の墓域内に建てられた「たまおどんのひのもん」を掲げて、之と對照して見よう。

首里おぎやかもひがなしまあかとだる
御一人よそひおどんの大あんじおぎやか
御一人きこゑおほきみのあんじおとちとのもいがれ
御一人さすかさのあんじまなべだる
御一人中ぐすくのあんじまにきよだる
御一人みやきぜんのあんじまもたいがれ
御一人ごゑくのあんじまさぶろがれ
御一人きんのあんじまさぶろがれ
御一人とよみぐすのあんじおもひふたがれ

と列記して、その下段に、「しよりの御み事、い上九人、この御するゑは千年萬年にいたるまでこのところ

におさまるべし、もしのちにあらそふ人あらばこのすみ見るべしこのかきつけそむく人あらばてんにあをぎちにふしてたゝるべし」と刻込んである。「もしのちに」がもしふかに（若し外に）になつた本もある。この文句だけを見ても、何か事件のあつたことがわかるが、これは當事の御家騷動を研究するに、都合のいゝ史料だと思ふ。あの列記した人名は、尙眞と母のおぎやかと妹のおとちとのもいがねと娘のまなべだると尙清以下四人の王子と都合九人であるが、もとよりこれが全家族ではなく、長子のうらおそひのあんじおみとくがね尙維衡と其の母の居仁と大ざとのあんじ尙朝榮との三人が、除かれてゐることを知らなければならぬ。そしてこの九人以外の者は、將來この墓に葬られてはならないとのことだから、この金石文が特に尙維衡の母子に對して書かれたことは明白なことである。

那覇の吳姓島我那覇に保存されてゐる「月浦樣由來傳」に、かういふことが見えてゐる。尙眞王の愛妾が、その子の尙清を王の世嗣にしようと思つて、王に再三世子の尙維衡を讒言したが、王は容易に信じなかつた。ところが彼女は或時かういふことを思ひついた。蜂を一匹捕へて來て胸の邊に置くと、尙維衡が走つて來て、大變だといひながら、之を取つてやらうとして、手が乳に觸れた。彼女は早速いゝ口實を見出して、御覽の通り、この子はこんなことをしますと、王に訴へたら、之を見てゐた王は大に怒つて、維衡を斬罪に處することにした。島我那覇の祖先の花城親方吳起良が、或朝首里城に出仕する途中、瀉原に大勢の人が集つてゐるのを見て、あれは何事かと聞くと、世子が今斬罪に處せられるとこ

ろだといふ。花城は早速飛んで行つて、刑吏と相談の上、王には殺したと報告することにして、王の怒りが和ぐまで、世子を自邸に隱匿することにした。そして數年の後、自分の長女を嫁せて、吳姓を名乘らせることにしたが、(これで向象賢等の家譜に原姓吳氏とある理由が能くわかつて來る)後日王の怒りが解けて、浦添城に住することを許されるやうになつた。云々。口碑にはこの間に面白いロマンスがあるが、こゝでは必要がないから、省くことにして、この話のどこまでが事實であるかを調べることにしよう。

この話によると、尙維衡は色氣がついて、十六七歲にもなつてゐたらしいが、あの金石文の建つた弘治十四年には、尙維衡はまだ八歲にしかなつてゐないので、華后に自分の乳に手を觸れたなどと口實を與へるやうな年頃でもないから、この邊は傳承していく間に、魏の文公の故事などが竄入して、傳說化したのだらうと思はれる。それから尙眞が愛兒を殺して來いといつたのは、殘酷極まる仕打であるが、當時の事情を考へて見ると、まんざら嘘でもないやうな氣がする。當時は戰國時代をさることまだ遠くない頃で、人柱や殉死の風などがあつたり、進貢使の一行が支那人を殺害したりして、殺伐の氣が遺つてゐたから、尙眞が如何に、「中華の風を移して此土の俗を易へる」に努めたからといつても、彼の心中から、殘忍性が全く取れたとはいはれまい。それ故に愛妾の愛に溺れて、世子を片付けて來いといふ位のことは、やり兼ねまじきことだと思はれるが、それにしても、七八歲位のあどけない我が子に死刑の

宣告が下せたのは、たゞたゞ驚くの外ない。これは恰度尙眞が三十七歳の男盛りの時に起つた悲劇であつた。

私は、この悲劇は遠く尙宣威の退位の問題にさざしたものではないかと思つてゐるが、どんなものであらうか。尙圓王妃のおぎやかは、尙圓薨去の時、三十に一つ二つを越えた位の女盛りであつたから、世の多くの貴族社會の未亡人に見るやうに、精力があり餘つて仕樣がなく、たうとうヒステリックになつてゐたであらう。その獨息子の尙眞は十三歳で、王位に卽いても差支がない年頃になつてゐたのである。それに、政治家達が之を差措いて、叔父の尙宣威を王位に卽けたのだから、彼女の癇癪玉は遂に爆發して、「きみてづり」の出現となつたのである。この頃尙眞は多分尙宣威の女の居仁（朝鮮の事情から類推ふると、尙眞より年上であつたらう）と結婚してゐたから、憎い者の娘には、やはり愛情がないもので、彼女は絶えず居仁に當り散らてしゐたに相違ない。かうして十數年の後に、居仁の腹に尙維衡が出來たが、彼女はこの孫にも餘り愛情を感じなかつたに相違ない。そこを、年が若くて王の寵愛を一身に集めた華后が、見て取つて、例の隱謀を巧らんで、見事に成功したのである。この時、尙圓の未亡人は五十七歳だつたが、これから五年たつて、弘治十八年（尙眞王の四十一歳の時）に六十一歳で死んでゐる。

それから、この時、王妃の居仁がどうしてゐたかと考へて見なければならぬ。彼女は騷動以前に死ん

でゐて、我が子の不幸を見ることが出來なかつたか、離縁されてゐて、我が子の不幸を城外で聞いて悲しんだか、城中にゐて、泣いて我が子の命を乞ふたか、三つの中どちらか一つでなければならぬ。この事については、記錄や口碑は何も語つてゐない。たゞ王代記に、壽幷葬地不傳と書いてあるばかりである。もしこの以前に死んでゐたとしたら、彼女は見上森陵（みあげもり）に葬られてゐて、玉陵（たまおどん）が新たに築かれた時、其處に改葬されてゐなければならぬ。或は子が罪を父に得た爲に、生母の遺骨をたまおどんに移すのを拒んだといふこともあり得ることだが、葬地不傳といふところから考へて見ると、この時、彼女はまだ生きてゐて、多分首里城中にゐて、愛兒が刑場に送られるのを見て、氣絶でもしたやうに思はれる。彼女は、同時に、或は間もなく、城中を逐出されたであらう。

尙眞の二男の大里王子尙朝榮は、王代記に、母竝生日忌日葬地不傳とあつて、「たまおどんのひのもん」には、その名が除かれてゐるから、尙維衡の同母弟でもあつたか、それとも、この人の位牌がもと天界寺に安置されてゐたから、妾腹の子で、夭死した者であつたか、その邊のところは、推測することが出來ぬ。まもたいがね今歸仁王子尙韶威は王代記には、三男となつて居り、向氏具志川家の家譜にも、さうなつてゐるが、同家譜に、弘治年間奉命赴北山といふことがあるのを見ると、彼は尙維衡よりもずつと年上であつたことがわかる。尙維衡は弘治十四年に八歳だから、弘治の終りの年卽ち十八年には、十二歳になる譯だが、尙韶威が彼と同歳であるとしても、十二歳にしかならないから、十二歳の少年が北

山の監守となれる筈がないからである。さうすると、尙韶威は尙維衡よりも十以上も年上で、尙眞の二十臺位の子であるとしなければならなくなつて來る。それから「たまおどんのひのもん」には、彼の名は尙淸の次に記されてゐるが、尙淸は尙維衡よりも四つ年下だから彼が、尙淸より年下である筈はないのである。これは尙淸はこの頃世子になつてゐたから、彼の上に位したまでのことで、何も解し難いことではないかと思ふ。序にいふが、尙眞に、妃と二夫人との外に多くの妻妾のあつたことは、後世の事實から類推して考へることが出來るが、現に尙元王の時の「よあすたべ」の一人の毛龍唫（大新城）も、實は尙眞王とグスクンチユー（采女の如きもの）との間に出來た子だといふ口碑さへ遺つてゐる。

思ふに、この廢嫡問題は、尙眞の生涯中の一大過失であつたらう。幸ひに、尙維衡がまだ幼少で、その上外戚が沒落してゐたので、よかつたものゝ、さうでなかつたとしたら、きつと一騷ぎ起つてゐたに相違ない。兎に角この事件は、尙宣威退位の事件と共に、祭政一致時代に於ける女子の勢力の如何に强かつたかを語るものであるが、尙眞は、その後とても、女子の勢力を押へやうとはせず、むしろ之を利用して、三山の遺民に臨んでゐる。

「月浦樣由來傳」に、かなり年月がたつて、尙眞は尙維衡に對する仕打を後悔し始めたが、この子が生きてゐるといふことを聞いて、胸を撫でおろし、浦添城に住居することを許したといつたやうなことが書いてあるが、これは恐らく事實であらう。嘉靖元年の十二月に、石門の東に建てられた國王頌德碑

中に、尙眞王が國母が薨去された時、斷然殉死を禁じたといふことが見えてゐるが、口碑によると、王が母君に死なれて、無常を感じてゐた眞最中に、一人の童子が泣きながら、城の石垣の上をぶらついてゐるのを見て、何故(なぜ)そんなことをするかと聞(き)かれると、自分は今度殉死すべき番に當つてゐますが、老母がこれを聞いたら、どんなに悲しむことでせうと答へたので、殉死は人情に背いた凶事であるといつて、たうとう之を禁じたといふことである。これは尙維衡の事件があつて五年後のことで、王がそろそろ自分の不人情を自覺し始めた頃だつたから、王の潛在意識に溫釀してゐた愛情が、端なくもこの童子に引出されて、尙維衡の身の上を考へると同時に、殉死といふ殘酷な風習を是非廢止しなければならないといふ氣を起した爲であらう。

又少々横道に這入つた。私はこれから尙眞が新制度を制定して近代琉球の基礎を築いたことを述べなければならないが、これは拙著『古琉球の政治』にくはしく書いて置いたので重複する恐れはあるが、こゝでは極く簡單に述べて、結論を急ぐことにしよう。

フレーザーは例の著書中に、兎に角、武力によりて他種族を征服し得た一種族が、其の優越な地位を保つためには、被征服者を魔術的にも征服することが必至的要件であつたことが充分に想像される。征服者の神を被征服者に强制し、征服者の偉大な魔術の力を崇拜させることにより、異種族を自己の種族と同化したであらう。この點から見れば、魔術は征服國家の基礎を確立するための必要條件であつたの

みならず、人種的融合に關しても、偉大な役目を演じたといふことになる。そしてこれを信じない者は全滅の不運を見る、といつたやうなことを述べてゐる。第一尙氏の征服國家は、この點に考へが及ばなかつた爲に、失敗したが、この征服國家の後を引續いだ第二尙氏は、この點に氣がついた爲に、成功したのである。魔術師を利用することを能く心得てゐた尙圓の子だけあつて、尙眞は前王朝が自分の權威に反對する反逆者を見つけ次第一人々々片付けていつたやうな舊式の統治法を採用しないで、十把一束にやつ付けて了ふ制度、（いはゞ魔術の發達したもの）といふ新式の統治法を發明して、三山の遺民に君臨したのである。

尙眞の時代に、首里城内及びその附近に建てられた金石文が七つ程あるが、就中正德四年（西暦一五〇九年）首里城内に建てられた百浦添之欄干之銘（ももうらそひのらんかんのめい）が、同時代の特徴を研究するに、最もいゝ史料だと思ふ。これは尙眞王の四十五歳の時、卽ち第二尙氏の地位が强固になつた頃のもので、その中に、この時代の政治の特徴が、十一ヶ條あげてあるが、煩を厭はず、之を列記して見よう。第一は、宗教問題で、佛を信じ、寺を造り、王が三寶に歸依したことである。これとりもなほさず、舊道德を棄てゝ、新道德を採用したことで、當時四海同胞といふ敎義を信ずることは、異種を統一する上に最も必要なことで、魔術といへば、これも亦一種の魔術に相違ない。第二は、民を愛し、租稅を輕くし、上下が和睦したことである。第三は、領土の所有權を確定したことで、八重山が叛したので、兵船を派遣して、之を征伐

し、本國と屬島との交通を一層頻繁にしたことである。第四は、風俗を改良し、非戰主義を實行したことで、「服は錦綉を裁し、器は金銀を用ひ、專ら刀劍弓矢を積んで、以て護國の利器となす。此邦財に武器を用ひる、他州の及ばざる所なり」と書いてある。なるほど、これは世界中何處にも見られないことであつたに相違ない。彼等は之を以て永遠の平和を保障した積りだつたが、この平和の小天地は、これから一世紀たゝないうちに、薩軍に蹂躙されて、三百年間の奴隷的平和を約束された。第五は、階級制度を設けて、秩序を立てたことである。第六は、都會の公園化である。勿論さういふ熟語は使つてないが、珍らしい木で垣根を造るとか、種々の草花を植ゑるとかで、四時春のやうにしたのである。第七もやはり、都會の公園化であるが、內園や寺院に築山などを造つて、遊覽の佳境にしたのである。第八は、宮中に繪畫を揭げ、管絃を備へ、屢々酒宴を張つて、內外の佳賓を持成し、社交の圓滑を計つたのである。第九は、從來支那との交通は、三年一次であつたが、卽位の初めに、歎願して一年一次にしたことである。これで國の財政は豐富になつたのである。第十は、支那文物の輸入である。卽ち中華の風を移して、此の土の風を易へたのである。第十一は、支那の宮室の制度に擬して、宮室を造りかへたことである。そして以上の十一ヶ條は、實に國王の盛德と忠臣の丕功とで出來たものだから、之を靑史に載せて、後の君臣の模範とし、之を金石に刻んで、後昆に知らさない譯にはいかないと書いてある。

この金石文は、尙眞王の治世の半ばより少し後に、建てられてゐるから、もしこの頃までに、分封割

據の制を更めること卽ち諸間切の按司（あぢべ）部に首里在住を命ずるといふ事業が完成してゐたとしたら、さういふ大事業は、きつとこの碑文中に特筆されなければならないのであるのに、少しもさういふ記事が見えないのを見ると、當時、各地方の諸大名は、全部はまだ首里に引越してゐなかつたといふことがわかる。この碑文を味つて見ると、尙眞王及び其時代の政治家の心持が、能くわかるやうな氣がする。首里を公園化したことや、宮室を立派にしたことや、屢々盛宴を張つたり、音樂を奏じたりして、諸按司を歡待したところなどは、餘程味ひのあることだと思ふ。思ふに、これは中央集權を斷行する前提であつたらう。諸按司やその家來達に、都會（おやぐに）生活は、實に面白いものだ、どうかして、一生かういふところで暮して見たい。といふ氣を起させたに相違ない。人情には古今かはりはない。現今の地方人士達が、都會生活にあこがれて、那覇市に集まつて來るのを見ても、推測することが出來る。尙眞は人心のこの傾向を利用して、參勤交代の制を定めたのであらう。そして知らず識らずの間に、彼等をして、「おやぐに」（都の義）生活にあこがれしめ、一人から二人、二人から三人といつたやうな風で、段々と、首里に在住するやうにしむけ、或時期に於て、全部を首里に引越させるやうにしたのであらう。中には不服の連中もゐたといふ口碑が遺つてゐるが、彼等の手には、もう何等の武器もなかつたのだから、或者はいやながら、或者は喜んで、首里に引越して來たものと思はれる。

兎に角、これら三地方の民は、殆ど百年間も相爭つたほど、性質の異つた種族であつたから、かうい

ふ連中が、同じ都會の中に生活するやうになつても、急に打解けるものではない。暫らくの間は、きつと小ぜり合ひをしたに相違ない。尙眞は、彼等が、容易に打解けないといふことを豫想して、首里を三平等といふ行政區劃に分けて、三種族を別々に置いた。卽ち南山の連中を眞和志の平等に、中山の連中を南風の平等に、北山の連中を北の平等に置き、その間に在來の首里人を混ぜて、彼等を首里化することにした。こゝに一つ注意すべきことは、今日の按司家の姓のことである。按司家は馬氏國頭家を除いては、悉く向姓になつてゐる。これらの按司家は、首里にやつて來た當時は、何れも尙家と姓を異にしてゐたが、四百年も經つうちに、いつしか尙家と同姓になつて了つた。多分機會のある毎に、第一尙氏は、何かの口實の下に、其の王子を按司家の養子にやるやうにして、たうとう按司家を全部同姓の者で占領することにした。これで尙家の政治家が、德川の政治家以上に諸侯の相續問題に嘴を容れたことがわかる。

以上私は尙眞王の中央集權を瞥見したが、更に一歩を進めて、これらの三種族が、相合して、わが琉球民族が形成されたとき、所謂宗敎の關係が、如何に變じたかといふこと、卽ち三種族が相合して、一民族を形成するに至つた時、其の中で最も勢力があつた尙家の神が、一歩を進めて新たに發生した民族全體の神となり、かうして相合した數多の種族が、皆之を以て共同の祭神を爲すに至つた經緯を述べなければならぬ。

琉球神道の本山ともいふ可き聞得大君御殿は、つい近頃まで、首里市の汀志良次にあつたが、昔は首里城の正門前の園比屋武御嶽のうしろにあつたといふ口碑が遺つてゐる。この神社は、崇神天皇時代に神宮が皇居の中にあつたやうに、尙眞王の中央集權の頃迄は、多分首里城内にあつたらう。そして尙家の氏神は、民族共同の神として、一般に崇拜されるやうになり、時の經つにつれて、其の神威はますます高まり、遂に一定の場所を選んで、其處に鎭座するに至つたのであらう。さてこの神社の神官は、きこゑ大ぎみといふ未婚の王女であつて、「女官御双紙」に、「此おほぎみは三十三君の最上となり、昔は女性の極位にて御座しに、大清康熙六丁未年王妃に次ぐ御位に改めたまふなり」とあるから、彼女は國民最高の神官であつて、神の前に、其の國民を代表するもので、伊勢神宮に奉仕した齋女王や、ローマのヴエスタの處女のやうなものであつたと思はれる。それは兎角、かういふ風に勢力のある尙家の氏神が、新來の種族等に開放された時、これら新來の種族の神々は、如何にして其の崇拜を繼續されたであらうか。

諸間切の按司部が、首里に永住するやうになつた時、首里王府では、按司掟といふ者を各間切に遣はして、之を督理させるやうにした。按司部及びその家人たちは、時折其の祖先の墳墓に參詣する爲に、故郷を見舞ふことがしば〳〵あつたやうである。かういふやうに、彼等をその郷里に歸すことは、復古的の考へをを起させる基になり、政策上、好ましくないので、首里王府では、三平等に銘々の逢拜所を

設けさせることにした。卽ち南風の平等は、赤向に首里殿内を、眞和志の平等は、山川に眞壁殿内を、北の平等は、儀保に儀保殿内を建てさせたのである。そしてこれらの神官は何れも未婚の女子で、名家の女子を以て之に任じ、其の職名を大あむしられと名づけた。このあむは母の義で、しられは知らす卽ち治めるの義であるから、大あむしられに、政治的の意味のあることは明である。三人のよあすたべ（卽三司官）が、三山又は三平等と關係して出來たかどうかは判然しないが、三人の大あむしられを三人のよあすたべと比較して考へると、その間に面白い關係がありさうに思はれる。この大あむしられたちは、大勢ののろくもい卽ち祝女と稱する田舍の女の神官等を支配して、政治上宗教上かなり重要な位置を占めてゐたのである。

これらの祝々も、等しく未婚の女子で、何れもその地方の名望家の女子が任命されて、世襲になつてゐたが、彼等は、任命される時には、銘々の監督なる大あむしられの所に行つて、辭令を受取つたのである。のろの神社を祝殿内といひ、一間切に數ヶ所もあつて、何れもその界隈の信仰の中心になつてゐた。そしてこののろの下にも、亦氏神に仕へる多くの尸婦卽ち根人又は神人が屬してゐた。これら大小數千の神々が、きこゑ大ぎみの一令の下に、出動した日には、實際佐敷の小按司の軍隊よりも、より强いものであつたに相違ない。前にも述べた通り、彼女等は、租稅の徵收にも關係したのであるから、宗教上に於て勢力があつたばかりでなく、政治經濟の上に於ても、勢力があつたと見なければなるまい。

「女や戰の魁」といふ俚諺については、前に一寸述べたが、尙眞王時代の八重山征伐の時、久米島の君南風が從軍したことは、「女官御双紙」その他の記錄にも書いてあつて、又「おもろの」中にも謳はれてゐる。當時の人は、この時戰爭に勝つたのは、彼女の奇計と呪詛とが與かつて力があつたと信じてゐたやうである。實際戰艦中の大ころ等（ますらを等）は、この女傑のオモロと祝詞とに鼓舞されたのであらう。この戰艦中には、君南風ばかりでなく、彼女の部下の祝々が十數人も乘つてゐたに相違ない。球陽を見ると、この時、八重山の叛軍は、大海に面して、陣を布いてゐたが、手々に枝葉（たぐさ）を持つた巫女が數十人、陣頭に立つて、天に號じ、地に呼び、一生懸命に、呪詛してゐたやうである。そしてこれ等の巫女等は、官軍が上陸して肉迫しても、一向畏れる氣色もなかつたといふことである。かうして彼等は、戰鬪を開始する前に、双方魔術を鬪はしてゐる。女子に戰の魁をさせたのは、當時南嶋全體の風習であつたと思はれる。否日本古代の風習であつた。（「猿田彦神の語義を發見するまで」參照）

開闢以來、沖繩の津々浦々に出現した神が、現人神であつたといふことは、既に述べたが、國王の卽位の時に出現せるキミマモンも、その翌年に出現するキミテヅリも、五年若くは七年毎に出現して、島民の善惡を判く新懸も、三十年若くは五十年に一度出現して、亂臣賊子を誅する荒神も、一代に一度出現して、津々浦々を廻り、國家を守護する浦マワリも、ところ大きみの御新下の時に、與那原に出現するね那原のミオヤダイリも、月毎に出現する月のミオヤダイリも、皆現人神であつた。これと同樣に、

各間切各村の嶽々森々に、時折出現する神も、船舶の進水式に出現する神も、皆現人神であつた。向象賢のやうな智者でさへ、これを疑はないのみか、「吾朝神國と申すは此等の事に依て也」といつた位だから、愚民が之を信じたのは無理もないことである。かういつても、今日の人は、容易に信じないかも知れないが、これで、實際三十六島の秩序が保たれてゐたから、不思議なのである。ところが袋中が「百年以來、民風大いに變じ、神怪の事今や卽ち絶ゆ矣」といつた通り、島津氏の琉球征伐以後は、これらの神々がとんと現はれなくなつたので、向象賢は世鑑の中に、

竊に念に、往古は人の心も皆信實無妄にして、專ら如在の誠敬のみなるにや、異朝の賊船襲來れば、或は大風を吹せ、或は水の潮と成、米の砂と成て、敵を拒ぐに便有とかや。今は世も澆季に及、人の心も皆驕奢邪慢にして、鬼神を敬禮するにも、無きが如くにし、剩へ神事祭事にも懈怠疎意なるにや、守護の神も現はれ給はず。是に依て天災荐に至て、飢饉衰微する事是多し。上下萬民之苦不レ可レ勝レ言矣

と嘆じてゐるが、これは島津氏の琉球征伐によつて惹起された神々の死について語つてゐるもので、注意すべき言葉だと思ふ。琉球の神道は、所謂三十六島を統一するためには、缺ぐ可からざる制度であつたが、既に被征服者を同化して了つた後は、一先づ其の使命を全うしたことになり、加之島津氏に征服されて、奴隷の境遇に沈淪して以來、尙家の位地は、却つて安固になつたので、この民族的宗教は、まづ〳〵手持ち無沙汰になつたのである。そしてかつて爲政者の手足となつて沖繩統一の事業を容易なら

しめた女子は、漸次政治の方面から驅逐されて、巫道に耽るやうになり、向象賢や蔡溫の如き政治家を手古摺らして、あべこべに、其の手足まとひになつて了つた。（「仕置」及び「濁物語」參照）

慶長役の敗戰で、沖繩は島津氏の支配の下に置かれて、爾來三百年間、奴隷の境遇に呻吟したが、近代的の言葉を以ていへば、第二尙氏は、折角苦心して造つた搾取の機關を其の儘島津氏に献上したのである。そして島津氏はこの機關を大いに改造して、大仕掛けの搾取をやつたのである。私は現今沖繩縣の窮狀の由つて來たる所は、玆に在ると思つてゐる。

ローマのカトーが、「奴隷はたゞ働かせよ、然らずんば、眠らせよと」いつた通り、當時の沖繩人は、たゞ租稅を拂ふ爲に生きてゐて、その制度に對して、疑を起すことは絕對に許されなかつたのである。具志頭親方蔡溫の手で編纂された「敎條」は、當時の國民讀本ともいふべきもので、島津氏の許す範圍內で、沖繩人が、如何にして生く可きかを規定したものであるが、その德目中に、勇氣もしくはさういつたやうなものが拔きにされてゐるのは、注意すべきことだと思ふ。兎に角、彼等に取つては、お上のなさることに、疑問を起したり、之を批評したりすることが、何よりも惡德とされてゐたのである。

話はずつと前に戻つて、護佐丸の最期のことになるが、右に述べたことを念頭に置いて、考へて見たら、琉球の正史「中山世鑑」に、護佐丸の事件について、一言半句も費してない向象賢の氣持が、能くわかつて來るのである。私が「異本毛氏由來傳」その他の史料によつて訂正したほんとの護佐丸は、寃

罪を蒙つて、王師の征討を受けた時、一戰を試みて、討死してゐるから、向象賢は、世鑑を書く時、護佐丸の問題に關して、少からず頭を痛めたに相違ない。世鑑といふ名稱をつけたほどの正史に、王師に手向ひした人のことを書く譯にもいかず、さうかといつて、最後の邊を訂正して、載せようとすると、護佐丸の事件は、世鑑脫稿の年(慶安三年西曆一六五〇年)から、僅百七十年前に起つたことで、當時の人の記憶にはまだ新らしいのであるから、さうする譯にもいかず、いつそのこと、書かないことにした に相違ない。けれども、これから半世紀も經つて、元祿十四年(西曆一七〇一年)に、編纂された漢文の正史「中山世譜」に、始めて、護佐丸の事が書かれ、「球陽」も亦之を引用してゐるが、この時には、もう彼の最期は、傳說化されて、彼は「毛氏先祖由來傳」にあるやうな、王師に對して敢て一矢も放たないで、自殺した從順な奴隷——忠臣——となつて現はれて來た。これは當時の政治家が、自分等の主義政策に合ふやうに、事實を作りかへて、國民道德の材料に利用したもので、かうして例の護佐丸傳說は沖繩の津々浦々に傳播されたのである。甚だしきに至つては、明淸(みんしん)の代り目の時、進貢使(しんこうし)となつて支那に行つた護佐丸の子孫の毛泰久が、きてんをきかして、うまく淸(しん)朝にわたりをつけた勳功によつて、永世祿を貰つたといふことが、毛氏豐見城家の家譜にもちやんと明記してあるに拘らず、之を、護佐丸の功に歸する傳說さへ作り出してゐる。

これで見ると、尙淸王の卽位十一年卽ち明の嘉靖十六年に、大島の酋長の一人なる與灣大親が、等し

く寃罪を蒙つて、征伐を受けた時少しの抵抗もしないで、縊死したと球陽に大書して、護佐丸と共に忠臣の部類に入れてあるが、これなども、やはりその最期のところは、怪しいと思ふ。兎に角、この邊の消息は、島津氏及び舊琉球政府が、かういつたやうな人物を、理想的琉球人として、歡迎してゐたことを語つてゐると思ふが、どんなものであらうか。

八

餘りに長くなつた。もう一二言費して、私はこの稿を結ぶことにしよう。第一尙氏の武力に威され、又第二尙氏の魔術に魅せられた沖繩人は、島津氏に與へられた身動きも出來ない制度の中にぶち込まれたが最後、この制度に對して、絕對に疑問を發することを許されないで、取らるべき總てのものを搾り取られた。そして搾取るべき何物も彼等の懷に殘らなくなつた頃、彼等は新制度の中に收容されたが、疲れ切つた彼等は、この中でも、蘇生することが出來ないで、悲慘な狀態をもつて、暗き滅亡の淵へ歩み寄つていつた。ところがこの狀態は若槻首相が貴族院で阪谷男の質問に答へられたやうに、果して現知事の努力によつて、遠からず回復される程度のものだらうか。この點について、私は大なる疑問を懷いてゐる。けれども、これは私の「孤島苦の琉球」に讓り、こゝでは、たゞ沖繩縣の救濟は、もつと根本的のものでなければならないが、現制度の中でそれが容易く實現されるかどうかは、疑問であるとの

一言を述べるに止めて置きたい。

「安田(あだ)の神鉦」や「君(きみ)てづりの百果報事(もゝくわはうごと)」の記事を見て、近代人は、きつと古琉球人の迷信を笑ふに違ひない。が、彼等も同様に、一種の魔術にかゝつてゐることを知らなければならぬ。たゞ彼等の場合には、魔術の形式が近代的になつてゐるだけで、彼等も、古琉人同様に、魔術にかゝつてゐながら、それを自覚しないのだから、天下は泰平なのである。

この論文は、大正十一年頃、大體の骨組が出來て、その後、沖縄縣の二三の教育部會で、講演した事もあるが、昨今氣が向いたので、こんなに書き綴つて見たのである。もとより、郷里琉球の讀者に讀んで貰ふ爲に物した特殊のものであるが、この一篇が多少學者の參考になることがあつたら、勿怪の幸ひである。(了)

伊波普猷